女性史研究

特集　モルガン100年忌記念

逐次刊行物
昭 57.7.13 和
国立婦人教育会館
情報図書室

第12集 '81・6

編集・家族史研究会

ないよう

——特集 『古代社会』著者L. H. モルガン100年忌記念——

連　帯　斉藤　節子　1

モルガン『古代社会』　アヴェルキエヴァ　2

アヴェルキエヴァ女史を悼む　26

モルガンをよむ　林　葉子　27

L. H. モルガン100年忌　布村　一夫　29

母権論　I　J. J. バッハオーフェン　46
訳・井上　五郎

連帯

斎藤節子

「私はうそのない社会を創っていきたい。そして、私たちの同族が胸を張って生きていけるよう、逃げかくれしないで『ナリバアルニ　バリジブッドオチ（人間らしく生きていけるように）』私も頑張っていきたい。そのためには、人の心に生きている『差別』の壁をいつの日にかみんなの力でとりのぞいていきたい。」と語るウィルタ・ゲンダーヌさん。そしてまた「長い間、差別に苦しんできた民族的な痛みなど、最初はシャモなんかには、わかってもらえないと考えていました。しかし大事なことは、過去のことばかりでなく本当の意味の連帯を追求することです」と訴えるウタリの鷲谷サトさん。……女であることの二重の苦しみを思うと胸が痛むのです。

いま、北海道では、少数民族の人権と文化を守るために、連帯しその輪を拡げて運動を発展させることが求められています。今まで告発された和人さえも、資本主義の差別と収奪の中におかれている被害者であり、その意味で連帯してたたかうことが可能であること。この視点は男女の差別をはじめとするあらゆる「差別」につながることで、一人でも差別される者のいる限り、みんなの痛みとしてうけとめ得る連帯感を創っていかなければならないのだと思います。さらに北海道には、資本主義の内国植民地として開発され、北辺の守りと開拓を担った屯田兵や、信仰の自由を求めた開拓農民たちをはじめとする労働の外に、囚人・タコ部屋・朝鮮人・中国人の強制労働の歴史があります。また、自由民権家を収監した北海道集治監開設百年を来年に控え、秩父事件をはじめとする自由民権、社会運動・労働運動そして戦争の歴史を掘りおこすことがすすめられています。

ここに北海道開拓の半分を支えた女性の労苦の軌跡を掘りおこし、私たち自身の心を掘りおこす中で、社会や歴史に対して主体的に生きる姿勢と、婦人解放・人間解放めざす明日への生き方を極めたいと思います。

私たちの十勝女性史研究コスモスの会では、月二回「女性の歴史」をテキストに、学習会をすすめていますが、ようやっと下巻「女性はいま立ちあがりつつある」に進みました。思えばこの高群逸枝さんゆかりの地熊本で開かれた六九年の全国教研に、私は「人権と民族の課題をどうとらえ、どう実践したか」のレポートで参加し、女子特性論と差別の中で、憲法違反の家庭一般女子のみ必修の違法性を訴えた時の、鮮烈な印象と感動を今も忘れません。その道は厳しくともねばり強く、家庭科の男女共修をすすめる運動を推しすすめていきたいと思っています。

モルガン『古代社会』

アヴェルキエヴァ

F・エンゲルスの言葉によると、原始についての学問において変革をなしとげたL・H・モルガンの古典的著作『古代社会』[1]（一八七七年）は、彼の多年の研究の成果であった。F・エンゲルスが正しく指摘したように、モルガンは一挙にじぶんの結論にたっしたのではなくて、「およそ四〇年、じぶんの材料にとりくんで、それを完全にじぶんのものにしたのである。」[2]じっさいには『古代社会』は、モルガンの第三の大きい著作であり、原始史にたいする彼の見解の進化の完成であった。

（1）　L・H・モルガン『古代社会。または野蛮から未開をへて文明にいたる人類進歩の経路の研究』、ニューヨーク、一八七七年。E・バーク・リーコック編の新版（ニューヨーク、一九六三年）、L・A・ホワイト編の新版（マサチューセッツ州、ケンブリッジ、一九六四年）、ロシア語訳であるL・A・モルガン『古代社会。または野蛮から未開をへて文明にいたる人類進歩の経路の研究』、レニングラード、一九三四年（ロシア語訳が正確でないばあいはL・A・ホワイト編、一九六四年版をみる）をみよ。

（2）　『マルクス・エンゲルス著作集』（ロシア語本）※第二一巻、二六頁。

※　〔　〕は訳注である。以下の『マルクス・エンゲルス著作集』はすべてロシア語本であるので、この訳注は省略する。なおここでの邦訳はロシア語訳からの重訳であるので、邦訳された全集本での訳とは、ややちがっている。また『古代社会』ロシア語訳からの邦訳も重訳であるが、これによってロシア語訳が正確でないばあいがあることが察せられる。

一八五一年に彼の最初の大きい労作――『イロクォイ族の連盟』[3]が刊行された。これはアメリカ・インディアン諸部族のうちの一部族の民族誌についての、アメリカ合州国で刊行された最初の科学的なモノグラフであった。この労作の刊行の年は、現在アメリカ合州国では、アメリカ民族科学の生誕の年とみなされている。この著作

のなかでモルガンは、彼によってくわしく研究されたイロクォイ諸部族連合の構造を、精密に記述したが、その著作にもちこまれた諸資料は、現在までもその学問的な意義をうしなっていない。

(3) L・H・モルガン『ホ・デ・ノ・サウ・ニすなわちイロクォイ族の連盟』、ロチェスター、一八五一年。われわれは『イロクォイ族の連盟』※※の表題でニューヨークで刊行された一九六二年版をもちいる。

※ つぎのパラグラフによまれるように、イロクォイ族を形成する六部族、そのうちのセネカ部族をとくに研究したものである。

※※ 「ホ・デ・ノ・サウ・ニすなわち」をとりさったものであり、「ルイス・ヘンリー・モルガン（一八一八―一八八一年）、先駆民族学者」というW・N・フェントンの一四頁にわたる序文をもっている。この本はいままで『イロクォイ連盟』と邦訳してきたものである。なおH・M・ロイド編の増補版、二巻が、原題のままで、ニューヨークで一九〇一年に刊行された。この版は近年復刻された。

イロクォイ族の諸部族の連合の構造を研究して、モルガンはイロクォイ族の氏族を発見し、氏族（それを「トライブ」と名称したとはいえ）※を、古代社会の組織の原初的な単位として、はじめて記述した。イロクォイ族の氏族制度を、モルガンは珍奇なものと解したのではなくて、「諸トライブ（諸氏族――ユ・ペ）※※への区分は、もっとも単純な社会組織である」[4]ことを指摘した。モルガンはここでイロクォイ族の親族名称※※※法を提出し、人びとを氏族に統合している母系紐帯、および氏族の族外婚を規定した。過去のイロクォイ族における私有財産の欠如を、彼は指摘した。ようするに、『イロクォイ族の連盟』のなかで、モルガンによってはじめて、イロクォイ族の氏族・部族的な制度が検討され、その氏族的組織が解明され、この組織のそのごの研究が、人類史における原始時代ぜんたいの本質の理解のための鍵を、モルガンにあたえたのである。すでにこの労作のなかで、血縁的社会と市民的社会への社会区分や、それらの歴史的諸関係についての考えがモルガンによってのべられたが、のちに彼によって、二つの社会組織の型（societas と civitas）についての構想へ発展させられた。「（氏族の――ユ・ペ）個々の成員たちをむすびつける血縁紐帯は、なんらかの国家形態の採用が血縁紐帯を不必要なものとし、防衛と福祉の目的を保証する別の連帯によって血縁紐帯をとりかえるまでは、必要である」、と彼はかいたが、さらに彼は、「諸トライブ（諸氏族――ユ・ペ）への有機的区分の新しい市民制度による」[5]、ときには困難なものである交替について、のべた。このようにして、『イロクォイ族の連盟』は、モルガンの哲学的・歴史的見解の確立における一段階として、大きな興味がある。この著作のなかでは、一八世紀の哲学者・啓蒙主義者たちによって提起された進歩のイデアの影響がすでにあらわれている。人類の一元性、人類の進歩的発展の前進性についての理念（イデア）は、インディアンをふくめての現在の後進諸民族を、完全な神の創造の台からひきおろされたものと解した人種差別主義的な退化説から、インディアンを熱烈にまもるために、モルガンによってここでのべられたのである。文明は、モルガンによると、時間と知識によってのみ野蛮からぬけだしたものであり、知識は――全人類の歴史的歩みの結果なのである。

（4）L・H・モルガン『イロクォイ族の連盟』六〇頁。

※　『古代社会』では、それまでもちいてきた「トライブ」を「ゲンス」にあらためたことがのべられている。また『古代社会』では「イロクォイ族の連盟」は「イロクォイ族連合体」とされている。

※※　「ユ・ペ」はアヴェルキエヴァの名と父称の頭文字であるので、これによって引用者あるいは筆者である彼女を意味している。

※※※　「ターミノロギー」の訳である。モルガンがつかっている血族と姻族の「システム」を「名称体系」と訳して区別する。

すでにこの労作のなかでモルガンは、私有と不平等の諸関係が古くからのものであるという理論に反対してのべている。この労作のなかで彼は、イロクォイ族社会での平等を強調し、そのなかに諸部族の同盟の形成の基礎をみた。同時にこの著書のなかでは、観念論的構想の影響があらわれている。イロクォイ族の過去を復元しながら、モルガンは、J・J・ルソーの理念をおもいださせるイロクォイ族の「原始状態」の理想化された様相をえがいており、このような社会の人びとの完全な平等と高い道徳的品質を強調している。諸部族の同盟のなかでの諸部族や諸氏族の平等をはっきりと過大評価しながら、イロクォイ族の伝説的な立法者たち――デガナヴェダ〔ダ・ガー・ノ・ウェ・ダー〕とハイアウォサ〔ハー・ヨ・ウェント・ハー〕の意識的な創造物であると、諸部族の同盟をまちがって解釈したのであった。

イロクォイ族社会のこの理想化された様相は、うたがいもなく、モルガンの情報提供者たちによってもモルガンにふきこまれたのである。諸保留地での貧乏、抑圧、差別待遇、前途のなさの諸条件のなかでしめされた、氏族生活における黄金時代としての過去についての表象は――当然の現象である。そして退廃したイロクォイ族は、彼らによって養取された若い法律家〔モルガン〕に、じぶんの過去について語り、平和、平等、友愛が支配していた理想的社会を彼にえがいてみせた。うたがいもなく、彼らの言葉にしたがってモルガンは、連盟の創立はインディアンたちのあいだの平和の確立という目的を追求したとかいた。同時に彼じしんは、イロクォイ族の侵略精神を指摘し、同盟の諸部族の不平等、征服された諸部族にたいするイロクォイ族による強制の諸事例をあげている。

『イロクォイ族の連盟』の著者である若いモルガンの意識のなかには、キリスト教のドグマがなおも深く根づいており、彼はキリスト教に唯一正しい宗教をみたのである。だが同時に彼は、神信仰は白人たちの特徴でないこと、「宗教的志向」はイロクォイ族にとって無縁ではないことを証明することにつとめた。彼らが信仰している「大霊」を、彼らは彼にふきこんだのである。

『イロクォイ族の連盟』の刊行の翌年に、モルガンはパンフレット『イロクォイ族における血縁と出自の諸基準』を刊行したが、一八五六年にはアメリカ労術振興協会で、このテーマでの報告をおこなった。[6] このあと彼は、しばらくのあいだ自分の研究をやめて、もっぱら弁護士の仕事に従事したのであり、「インディアン問題を放置した」ことを、じぶんの日記にかいた。[7]

（6）L・A・ホワイト『いかにしてモルガンは「血族と姻族の諸名称体系」をかくにいたったか？』――「ミシガン科学・

芸術・文学アカデミー誌」、第四二巻、一九五七年、二六二―二六五頁所載。※

(7) 同上、二六二―二六五頁。※※

※ この一八五六年にアメリカ学術振興協会の会員にえらばれ、同年にオールバニ市でひらかれたこの協会の年次大会で報告したのである。

※※ モルガンは「一八五〇年のおわりから一八五七年の夏までインディアン問題はまったくやめた」とかいているのであるが、これはホワイト編『古代社会』へのホワイト序文のなかでも引用されている。したがってインディアン研究を、『イロクォイ族の連盟』刊行のぜんごからやめたのであり、一八五七年夏のモントリオールでのアメリカ学術振興協会での報告をもって、インディアン研究を再開したのである。

だが、彼が株主となった鉄道会社の仕事で、国内の旅行をしながら、オジブワ族とダコタ族の親族名称体系が、彼が記述したイロクォイ族のものと似ていることを、モルガンは「一八五八年に」偶然にも発見した。この発見が、アメリカの、ついで世界のその他の部分の、さまざまな諸部族における親族名称体系についての、そのごの研究の道へ、モルガンをおしやったのである。

一八五九年―一八六二年にモルガンは、その当時アパラティア山脈の西方のアメリカ大平原の広い地域に分散していた諸部族への、これらの諸部族の民族誌についての具体的な資料をあつめるための、四回の学術探険旅行をおこなっている。(8)

(8) L・H・モルガン『インディアン調査日誌、一八五九―一八六二年』アン＝アーバー、一九五九年。※

※ L・A・ホワイトによる編集であり、彼の序文がつけられている。

一八七一年までに、世界のさまざまな民族の親族名称法についての厖大な事実資料が、モルガンによってあつめられたが、その資料を彼はその著作『人類家族の血族と姻族の名称諸体系』のなかで分析し分類した。(9) これはモルガンの第二の基本的な労作であったが、そのなかで彼は、原始社会の氏族制度についてのじぶんの考えを発展させているし、乱婚から集団婚のさまざまな諸段階と諸形態をへて、階級社会における一夫一妻婚への家族の進化についての学説を提起している。普遍化された諸結論は、モルガンによって、この労作の結論部分でのべられた。ここで彼は、彼によってあつめられたすべての親族名称法を二つの名称体系（システム）――類別制と記述制との――にわけた。ここでも彼によって、現存している親族名称法が、過去においてはじっさいの親族諸関係に照応したこと、家族諸形態はその歴史をもち、家族諸形態は親族諸名称よりも早く変化すること、類別制親族名称諸体系が個別婚や個別的家族の発生に先行していることについての理念が、彼によってのべられた。

(9) L・H・モルガン『人類家族の血族と姻族の名称諸体系』――「スミソニアン研究所紀要」第一七巻、ワシントン、一八七一年。※

※ この著作は一八七〇年の刊行ともされているが、まだ確認できない。一九六六年には、一八七一年版による復刻が刊行された。

モルガンのこの労作は、そのすべての内容では、家父長説の反駁にむけられたのであった。モルガンのこの真に記念碑的な著作は、

彼の同時代人たちによって高く評価され、今日でもその意義をうしなっていない。これによって親族名称一般の研究の基礎がおかれた。この点ではモルガンには先行者はいなかった。W・リヴァースの意見によると、モルガンは類別制親族名称体系を発見し、この問題についての厖大な事実資料をあつめたばかりでなく、じぶんの発見の理論的意義をしめしたのであった。[10]

(10) W・H・R・リヴァース『親族と社会組織』、ロンドン、一九一四年、四―五頁。

モルガンの著作『古代社会』は、『……名称諸体系』のなかでのべられた普遍化のつづきであり、そのごの検討であった。モルガンは直接的には『古代社会』の仕事を、一八七一年※から一八七七年までおこない、この期間に多くの準備的な諸論文を発表した。この著作のなかでモルガンは、歴史の初期の諸時期についての多くの具体的資料の、学問の歴史では最初の、科学的な体系化をあたえた。L・ホワイトの計算によると、事実資料は著書の六〇%をしめている。事実資料は、人類の進歩的発展の歴史の時代区分をつくりだすことを、これについての知識をもっているモルガンにゆるしたのである。

※ 一八七四年にホルト出版社のヘンリー・ホルトから、『……名称諸体系』の改訂版をだすことをたのまれ、これが『古代社会』となった。

モルガンは、人類の進歩の四分野すなわち発見と発明の発展、「統治観念」、「家族と婚姻の観念」、「財産の観念」の発展におけるじぶんの知識にもとづいて、「低い諸段階から文明のさかいにいたるまでの人類の上昇」の諸法則を、定式化する資格があるとみなした。そのほかの人類の進歩のあまりにも重大な諸様相がありうるが、それらの記述を彼は準備しなかった、と彼はしている。「野蛮から文明にいたる人類進歩の道程にそって、平行して発展している上述の四つの現象群は、この著書における検討の主要な対象である」[11]、と彼はかいている。この著書の四篇の一つが各「現象群」にささげられた。「発展の系列」――社会生活のこれらのもっとも重要な諸様相の分析が、学問の歴史でははじめて、モルガンをして、先階級社会の本質の十分に基礎づけられた歴史的・哲学的な構想を定式化すること、氏族がこの社会の構造の基本的な単位であったと証明することを、ゆるしたのであった。

(11) L・H・モルガン『古代社会』、六頁(青山道夫訳『古代社会』、上巻、三一頁)。

この著作の第一篇でモルガンは、「発明と発見の蓄積とむすびついて」の人類の経済的および文化的な発展の一般的様相をえがいている。第二篇で彼は、氏族的社会から国家発生までの社会諸形態の発展の分析をおこなっている。第三篇は婚姻と家族の歴史に、第四篇は財産の歴史にささげられた。著書のはじめにL・H・モルガンは、生活手段の獲得方法の発展、発明と発見の蓄積の発展――これらのたすけによって人類は自然を征服した――を追求して、本質的には生産諸力の発展の歴史を指摘したが、彼の考えによると、この歴史が野蛮と未開の段階をへて文明にいたる人類の進歩的発展を規定したのである。

人類史の三段階区分は、周知のように、つとにモルガン以前に学問では考えられていた。彼じしんもこれをみとめ、じぶんの労作のマックイルヴェンへの献辞のなかで、これにかんするW・D・ホイ

ットニとJ・ケーンズの言葉を引用している。[12] だが、人類進歩の時代区分のきわめて初期の理論家たちであったのは、Ch・モンテスキュー、A・ファーガソン、W・ロバートソンなどのような一八世紀の哲学者たちや歴史家たちであった。そして彼らによってつくられた歴史諸時代は、きわめて抽象的な、きわめて普遍的な性格をもっていた。人類の進歩的発展の彼らの説明では、二つの伝統――唯物論的と観念論的との――をさがしだすことができる。たとえば啓蒙家たちのスコットランド学派の代表者であるJ・ケーンズは、人類の理性の活動の成果として歴史を説明し、W・ロバートソンは人類史の諸段階の交替を、生活手段の生産方法における変化とむすびつけた。モルガンの見解に、これら二つの伝統の影響があらわれていることが特徴である。

(12) W・D・ホイットニ『東洋および言語の研究』ニューヨーク、一八七三年。J・ケーンズ『西欧人類学と特殊西欧諸共同体』※――『人類学』第一巻二号、ロンドン、一八七四年。

※ この題名は『古代社会』ではしめされていない。

デンマークの考古学者〔Ch・J・〕トムセンによって提起された歴史時代区分（石器時代、青銅器時代および鉄器時代）を肯定的に評価しながら、モルガンはその時代区分の制約を指摘した。その時代区分は「古代の生産物の分類」のためにだけ適用されるとみなし、「学問の発展は別の細分を必要ならしめた……おそらくは、長い間隔をおいて出現した生活手段の継続的な生産方法は、つまるところ、それらが社会状態にたいする大きい影響のために、このような細分のためのもっとも満足すべき基礎をあたえる」[13]、と彼はかいた。だが、生産諸力の発展のなかに、歴史の時代区分の真実の規準を、天才的とみてとって、この方向においてはきわめてわずかな研究がなされただけなので、これがトムセンをして時代区分の基礎に生産手段の生産方法をおき、人類史における主要な発明と発見の出現を時代区分の道標として採用することをさまたげた、とモルガンは指摘した。だが、その当時の学問的知識の制約にもかかわらず、モルガンはその先行者たちのものよりも、より細分され、より具体的な原始史の時代区分を、物質的に基礎づけることができた。彼はそれを六つの「エスノス時代」にわけた。階級社会の歴史を彼は文明という一時代に一般化してまとめ、それを私有財産と領域にもとづいた市民的（政治的）社会として特徴づけた。モルガンの研究の目的にとっては、これで十分であった。彼の『古代社会』は、人類史における先階級時代にささげられたのである。

(13) L・H・モルガン『古代社会』、一五頁（青山訳本、上巻、三〇頁）。

モルガンによると、各「エスノス時代」は「独自の社会状態であり、特殊な生活様式によって区別される。」[14] そして著書のはじめに、発明と発見の、統治、家族、財産の観念の「平行的発展」について、モルガンはかいているとはいえ、これらの現象群の相互関係について、各「エスノス時代」における諸現象の特殊性について、生産諸力の状態を決定する意義についての結論にたっしている。社会史の諸時代の交替をモルガンは、物質生産の方法の交代とむすびつけた。そして発見と発明がモルガンによって、生産諸力の発展と諸エスノス時代の交替の主要な諸指標としてとりあげられたが、モルガンの歴史構想についての多くの解明者たちの確認に反して、モルガンは技術決定論者ではなかった。本質的には彼の原始社会の進歩

的発展の歴史時代区分の基礎には、二つの規準すなわち生産諸力の発展（発見と発明の進歩）と財産の発達がおかれた。モルガンの著書の第一篇と論理的にむすびつけられたのは、「財産観念の発展」にささげられた第四篇である。マルクスがこの著書の摘要※のさいに、第一篇と第三篇のあとに、第四篇を摘要したのは偶然ではない。第四篇では「財産観念」の語にもかかわらず、モルガンは財産関係の発展についての完全に歴史・唯物論的な解明をあたえた。たとえば彼は、「最古の財産観念は、人類のもっとも基本的な要求である生活手段の生産方法ともっとも密接にむすびついていた……このようにして私有財産の発展は、発明と発見の進歩とともにすすむ。各エスノス期は、発明の数ばかりでなく、これらの発明の結果である財産の多様性と数の点で、先行の時期にくらべて、進歩をしめしている。財産形態の多様性は、財産の占有と相続にかんする一定の規準の出現をともなった。占有と相続のこれらの基準が依存している諸慣習は、社会組織の状態と進歩的発展とによって決定される。このようにして財産の発達は、発明や発見と、人類進歩のエスノス諸時期を特徴づけている社会制度の改良と、密接にむすびついていた」[15]、とかいた。モルガンはこの章で、原始史の「エスノス諸時期」をへて、文明にいたるまでの財産の発達を追求しているが、生産諸力の発展ばかりでなく、社会制度の発展とむすびつけた。彼は財産の二つの歴史的形態すなわち集団的形態と私的形態をしめした。土地や住居の集団的所有に、彼は家庭生活の共産主義の基礎、氏族的社会の全成員の平等の基礎をみた[16]。モルガンは生産と分配とにおける集団主義が、私有の諸関係に先行したこと、生活手段の共有が私有に先行した形態であることを、はっきりとしめしている。彼は原始の氏族的社会を、私有がない、それにともなっての人間による人間の搾取のない、国家のない、平等の社会として特徴づけている。さらに、未開期における物的生産の分野での改良とむすびついての、私有の発展を追求して、私有は階級的「政治的」社会の基礎になるという結論に、モルガンは到達する。このようにして、「財産観念」の表現にかかわらず、あれこれの財産形態の支配の原因を、人びとの頭のなかではなくて、物的生産の発達のなかに、モルガンに探求した。なるほどモルガンは、財産一般についてかいたが、彼の自然発生的な唯物論には、生産諸関係の理解、生産手段にたいするさまざまな関係をもっている人びとの一定のグループとしての諸階級の理解には、制約がつきまとっていた。

（14）L・H・モルガン『古代社会』、一五頁、四四五頁（青山訳本、上巻、三〇―三一頁。下巻、三六〇頁）。

（15）同上、四四五頁（青山訳本、下巻、三六〇頁）。

（16）L・H・モルガン『古代社会』（ロシア語訳）一九九頁（青山訳本、下巻、一一〇頁）。

※　この『摘要』については、拙訳『古代社会ノート』未来社、一九七六年をみよ。この邦訳の底本はL・クレーダー編『マルクス・民族学ノート』におさめられている。『マルクス・エンゲルス著作集』ロシア語本、第四五巻に『古代社会ノート』のロシア語訳があるが、東ドイツではこれのオリジナル・テキストは刊行されていない。

モルガンはその著作の第二篇を、「統治観念の発達」と名づけ、豊富な事実資料にもとづいて、氏族制度の本質の分析にささげ、発生期から解体までの氏族制度の歴史を追求し、その歴史を唯物論的

立場から解明した。ここでは、彼の原始についての学説――原始社会の組織の基本的で普遍的な形態としての氏族についての学説の基本部分がのべられた。氏族問題にたいするモルガンの唯物論的態度は、「モルガンによってあつめられた豊富な資料は、氏族組織の本質を分析する可能性を彼にあたえ、氏族組織の解明はイデオロギー諸関係（たとえば法律的または宗教的な諸関係）ではなくて、物質的諸関係にもとめねばならないという結論を彼はつくりだした[17]」、とかいたヴェ・イ・レーニンによって指摘されたのである。

（17）『レーニン全集』（ロシア語本）第一八巻、一四九頁。

インディアンのあいだでの具体的な野外調査、世界の多くの民族における親族名称諸体系についての彼によってあつめられた厖大な資料は、先階級社会の組織の発端的細胞そして本原的基礎としての母系氏族の発見に、モルガンをみちびいた。これは、周知のように、K・マルクスとF・エンゲルスによってきわめて高く評価されたのである。「文化諸民族の父権にもとづく氏族に先行する段階として、母権にもとづく本原的氏族の新たになされたこの発見は、原始史にとって、ダーウィンの進化論が生物学にとって、またマルクスの余剰価値理論が経済学にとってもっているのと同じ意義をもっている……それじしんによって、原始史研究における新しい時代がひらかれたことは、すべてのものにとってあきらかである。母権にもとづく氏族が軸となり、そのまわりをこの学問ぜんたいが回転している……[18]」、とエンゲルスはかいている。モルガンは先階級の氏族的社会を階級社会と対置した。彼は、社会制度の二つのちがった型としてそれらを説明している。「人類の経験は……科学的意義での型という語をつかうならば、社会制度の二つの型だけをつくりだした。これら両者は明確な体系的な社会組織であった。前者のもっと古いものは、氏族、胞族、部族にもとづいた社会組織であった。後者のもっとも新しいものは地域と財産にもとづいた政治的組織であった[19]」、とモルガンはかいている。

（18）『マルクス・エンゲルス著作』、第二二巻、二二三頁（戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源』、二五頁）。

（19）L・H・モルガン『古代社会』（ロシア語訳）三八頁（青山訳本、上巻、九七頁）。

モルガンについての文献では、彼が社会制度の二つの型についての理念を、つとに一八六一年[20]にそれについてかいたH・メーンから借用した、としばしばかかれている。だが、メーンよりもずっと早く――一八五一年にこの理念は、さきに指摘したように、モルガンによって『イロクォイ族の連盟』のなかでのべられたのである[21]。この年に、G・グロートもこれについてかき、古代ギリシア人の社会生活を特徴づけた[22]。モルガンは『古代社会』のなかで、この問題とのつながりでは、H・メーンについてのべていないが、ギリシア氏族についての個所でグロートからの長い引用をおこなっているが、そこではギリシア人における組織の二つの形態についてのべられている。すなわち諸氏族の連合と人身的諸関係とにもとづいたより太古的な形態と、財産と居住地が主要な意義をもち、人身的要素が第二次的な地位をしめている政治的な同盟にもとづいた――ずっと後代の形態である[23]。だがグロートは、ギリシア社会にかんしてだけ、これについてのべたのであり、つとに、彼よりも以前に、この理念はニーブールによってその『ローマ史[24]』のなかでのべられたのであった。モルガンは社会制度のこれら二つの型を、人類史における普

遍的な法則とみたのである。モルガンによる原始社会の氏族組織の発見、氏族の具体的な歴史的諸形態の特徴づけは、社会制度の第一型をそのまったき具体性においてしめすことを、モルガンにゆるしたのである。それを、氏族制度の古代性と氏族制度の普遍性とを一般的に否定したH・メーンに期待してはならなかった。社会の二つの型の対立を解明して、モルガンは一方の社会型の他方の社会型による交替を、財産形態の進化とむすびつけて追求することをこころみた。モルガンは、氏族組織の本質を弁証法的に評価しながら、氏族的社会そのものがその対立物――「政治的」社会をうみだすことをしめした。彼は父系出自への移行が、氏族的社会の「政治的」社会への転化過程でのすでに一歩であったとかいている。

(20) M・フォーテス「社会人類学」――『二〇世紀における科学思想』、ロンドン、一九五一年、三三六頁。R・H・ロウィ『原始社会』、ニューヨーク、一九二〇年、五〇頁、三一九頁。

(21) L・H・モルガン『イロクォイ族の連盟』、七八頁、七九頁。

(22) G・グロート『ギリシア史』、第三版、ロンドン、一八五一年、第三巻、七五―七九頁。

(23) L・H・モルガン『古代社会』〔ロシア語訳〕一三三頁〔青山訳本、上巻、三一三頁〕。

(24) B・G・ニーブール『ローマ史』、ベルリン、一八一一―一八三一年、第一巻。

人類史の時代区分では、モルガンは現在の資本主義社会を、人類進歩の最高の達成としたが、社会の進歩的発展の最終的到達とはみなさなかった。それで、モルガンのブルジョア社会とくにアメリカ社会の擁護論でのモルガンの判決はまったく根拠がなかった。これらの確認を、『古代社会』にふくまれているつぎのような句のなかであきらかにすることがこころみられる。そこでは、「アメリカ合州国をのぞくいたるところで、特権諸階級が数千年のあいだ、同じ地位にとどまっていたとはいえ、特権諸階級がどれほど重い負担を社会にたいしてせおっているかはまったく明らかになった」[25]とよまれる。アメリカ合州国で特権諸階級が、旧世界におけるように、数千年存在しているのではないが、いたるところで特権諸階級は――社会にとって重荷であるということが、ここでのモルガンでは問題になっていることがあきらかである。これらの年代記的なちがいにもかかわらず、モルガンはアメリカ社会をも社会制度の二つの型のうちの第二型にぞくせしめ、文明期のそのほかの諸社会とおなじく、アメリカ社会に徹底的な批判をあびせたのである。彼はこの社会の諸欠陥をはっきりと認識していた。「文明の到来とともに、財産の増大は大きい規模に達し、財産の諸形態は多様となり、それの使用は拡大し、所有者たちのための財産利用はたくみになったので、財産は人びとにとっては、うちかちがたい力となった」[26]、と彼はかいた。だがモルガンは、この社会の過渡的性格をみた。「富のたんなる追求は人類の最終の使命ではない……文明の開始からすぎさった時間は、人類によって生活された時間のとるにたらない部分、これから生きねばならない時間のとるにたらない部分にすぎない。社会の消滅は、富が社会の唯一の目的である行路の終結にならねばならない、というのは、このような行路は、それじしんの破滅の諸要素をふくんでいるからである。統治におけるデモクラシィ、社会諸関係における友愛、法の平等、一般的な教養が、経験、知性および知識

が確固としてめざしているつぎのより高い社会型を特徴づけるであろう。それは古代諸氏族の自由、平等、友愛の復活――より高い形態での――であろう。[27]」みたようにモルガンの『古代社会』では、人類によってつくられた二つの社会型――先階級社会と階級社会――についてばかりでなく、第三の、未来の無階級社会の型についても問題になっている。まさにこのゆえに、F・エンゲルスはモルガンの共産主義的諸結論についてかいたのである。[28]モルガンのこれらの諸結論は、現在ではアメリカ合州国の進歩的な学者たちによって発展させられている。[29]

(25) L・H・モルガン『古代社会』〔ロシア語訳〕三二九頁〔青山訳本、下巻、三八九頁〕。

(26) 同上。

(27) L・H・モルガン『古代社会』、四六七頁〔青山訳本、下巻、三八九―三九〇頁〕。

(28) 『マルクス・エンゲルス著作集』、第二七巻、三五八頁。※

(29) S・ダイアモンド『原始をさがして。文明の批判』、ニューブランズ ウィック、一九七四年をみよ。

※ 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』、第二一巻、一七七頁をさしているようである。

その著作の第三篇「家族観念の発達」では、モルガンは広汎な資料にもとづいて、乱婚から、集団婚や対偶婚をへて、一夫一妻婚への、つぎつぎと交替する諸形態の系列として、婚姻と家族の歴史を追求している。個別婚と個別的家族が――歴史的諸範疇であり、その発展ではさまざまな諸段階をとおることを、彼ははっきりとしめしている。彼はそれらの歴史を、社会・経済的発展のすべての歩みとむすびつけ、個別婚と個別的な一夫一妻婚との発生が、私有財産や財産相続の出現と直接にむすびついていることを、確固として証明している。

このようにして「家族観念」の発達に、物的解明があたえられた。モルガンの著作のこの篇の全内容は、家父長説にたいする根拠ある反駁であるが、家父長説によると、家父長的家族は人類社会の発端的な細胞であり、永久の細胞であるとみなされたのである。彼は『古代社会』のなかで、この学説の賛同者たちであるG・グロート、B・ニーブール、R・トルンヴァルト、H・メーンを批判しているのである。

◆　◆

多くのモルガン批判者たちは、モルガンが普遍化のなかで、人類精神の一元性から出発したとのべて、モルガンの観念論を非難した。たとえばB・スターンは、「モルガンはその普遍的な進化主義的図式のなかで、バスティアンとおなじく、平行的発達をもたらしている人類精神の一元性や共通起原を仮定している。[30]」とかいている。だが、スターンによって引用された引用文からは、このような結論をくだすことはできない。モルガンは、「人種の歴史は単一の端初をもっており、その経験や進歩では一元である……発明と発見は……人類の起原の一元性を、おなじ発展段階での人類の要求の類似を、同じ社会制度のもとでの人類の知性のはたらきの一様性をしめしている[31]」（傍点――ユ・ペ）、とかいている。みられるように、人類の知性の単一については、モルガンは最後にかいている。彼は、発明と発見における類似をもたらす人びとの要求の類似に、第

一位をあたえた。そしてモルガンにおける当該個所では、一般的には人びとのあいだでの類似ではなくて、社会発展の同一段階にある人びとのあいだでの類似が問題になっているのである。

(30) B・J・スターン『モルガン。社会進化主義者』、シカゴ、一九三一年、一三一頁。

(31) L・H・モルガン『古代社会』〔ロシア語訳〕三頁〔青山訳本、上巻、二〇頁〕。

有名なアメリカの学者――モルガン伝記者――のL・ホワイトの「モルガンの哲学は、すぐれて心理的または観念論的である」[32]との考えは、まちがっているとおもわれる。

(32) 〔L・A・ホワイト編〕L・H・モルガン『古代社会』へのL・A・ホワイトの序文。前づけ二〇頁。

モルガンは、「思考の萌芽」についてのもっとも普遍的な、発端的なじぶんの諸考察で、そしてじぶんの著作のあとの三篇の題名で、観念論的な諸命題をしめした。いかなる程度であれ、これは「啓蒙主義」の哲学者たちからうけつがれた当時の観念論的思潮にたいする彼の貢献である。L・ホワイトが確定しているように、人類の知性に固有な「思考の萌芽」について、天賦の理念についてかいた一八世紀のスコットランドの啓蒙哲学者ケーンズの諸著作を、モルガンは大学で熱心に研究したのであった。これらの理念を、A・R・J・テュルゴはその著作『人類精神の進歩』のなかで、J・A・コンドルセは『人類精神の進歩の歴史の素描』のなかで、発展させたが、民族学ではこれらの理念は、A・バスティアンの「基本的理念」の構想のなかで発展した。だがモルガンでは、「理念」の概念は特殊な意味をもった。フランスの学者のE・テレイによって正しく指示されたように、モルガンは「理念」の概念をもちいるが、彼によって分析された諸現象の経験論的な歴史をのべるのではなくて、客観的な論理、諸現象の発展の客観的な必然性をしめすことを、これによって強調したのである。[33]

(33) E・テレイ「モルガンと現代民族学」――『「原始」社会に面するマルクス主義』、パリ、一九六九年（イギリス語訳『マルクス主義と「原始」社会』、ニューヨーク、一九七二年、二五―二六頁）。

巨大な事実資料の科学的分析は、自然発生的にモルガンを唯物論的結論へみちびいた。彼はじぶんの時代の観念論的思潮をこえることができた。著作のなかでのべられた人類の一元性、歴史過程の単一性の概念、先階級社会の本質についての彼の学説は、その時代のもっとも進歩的な進化主義よりも高くたっている。モルガンによる歴史の理解は、本質的に深く、唯物論的である。彼によってつくられた歴史的・哲学的構想は、彼を科学的共産主義の創始者たちの見解にちかづけた。F・エンゲルスは、「モルガンはアメリカで、マルクスによって四〇年まえに発見された歴史の唯物論的理解を、じぶんなりに新たに発見した」[34]、と強調した。だがモルガンは自然発生的唯物論者であり、彼によって蓄積された多くの事実資料に左右されて、唯物論にたっしたのである。学問的な誠実さが、彼をしてブルジョア的制限を克服させ、原始ばかりでなく、人類進歩一般についての革命的な学説をつくらせたのである。彼の唯物論的方法論は、ブルジョア民族学における進化主義の限界を克服した。進歩の理念の賛同者たちであったのは、周知のように、モルガンの同時代人たち――H・スペンサー、E・タイラー、J・ラボックであっ

た。だが彼らの進歩の理解は、じっさいには「漸次性」の理念を基礎とした「一系的進化主義」であった。モルガンは彼らとはちがって、ソヴェトの学者エム・オ・コスヴェンが正しく指摘したように、「緩慢に漸次的になされる進歩ではなくて、よりよい未来へむかっての、ますます早くなる人類前進運動としての進歩の理念を、意気たかくひきだしている。」[35] それにしてもモルガンは、現在では知られている人類の過去についての豊富な資料をもたずに、「人類進歩の総和にたいする、野蛮期の人類進歩の程度は、そのごの未開の三小期における進歩よりも、顕著であった。まさにまた未開の全期における進歩は、文明の全期における進歩よりも、はるかに顕著であった」[36]、と規定した。進歩のテンポの不均等を規定することから出発して、モルガンはエスノス諸時期の長さをはかることをこころみた。「幾何学的進歩の学説によると、野蛮期は未開期よりも長くなければならず、ついで未開期は文明期よりも長くなければならなかった、[37] とモルガンはかいている。

(34) 『マルクス・エンゲルス著作集』、第二一巻、二五頁〔『マルクス・エンゲルス全集』、第二一巻、二七頁。戸原訳本、九頁。また第三六巻、九七頁〔第三六巻、一〇〇頁〕※をみよ。

(35) エム・オ・コスヴェン『L・H・モルガン、生涯と学説』、レニングラード、一九三三年、五四頁。

(36) L・H・モルガン『古代社会』、三九頁〔青山訳本、上巻六二頁〕。

(37) L・H・モルガン『古代社会』〔ロシア語訳〕二五頁〔青山訳本、上巻、六三頁〕。

※ これは一八八四年二月一六日づけのエンゲルスのカウツキーあての手紙のなかでのことである。

モルガンを単系的進化主義者にかぞえることが、西欧の歴史学ではひろくおこなわれているが、これは根拠がないということを、単系的ではなくて多系的な人類進歩についてのモルガンの発言もまたものがたっている。すでにみずからの研究のはじめにモルガンは、たとえば、「さいごに、人類の経験はほとんど似たような諸経路によって発展したと指摘すべきである」[38]、とかいている。すこしさきでは、「人類の存在の原始時代にむかっての人類進歩のいくつかの線（傍点――ユ・ペ）にそってさかのぼりながら、そしてその主要な諸制度と発明を発生の順につきつぎとうつらせながら、各時期の達成を認識することができる」[39]、とよまれる。世界のさまざまな地方での人類の発展が「同一の発展段階にたっした人類のすべての部族と民族になっては、別べつではあるが、同一の経路によって、きわめて類似的に」[40] すすむことができたとモルガンは考えた。歴史のさまざまな諸時期の開始をしめす進歩の主要な諸指標についてのべ、「絶対的であり、全大陸において例外なくあてはまるような……進歩の諸指標を発見することはむつかしいが、不可能ではない」[41]、と彼はかいている。彼は世界の両部分のちがった自然的、歴史的諸条件のために、旧世界と新世界における同一の「エスノス期」の諸民族の文化におけるちがいをみとめた。[42] モルガンは借用と相互影響をかんがえた。「大陸的むすびつきがあったところはどこでも、すべての部族は各部族の進歩に、ある程度は参与したにちがいなかった。すべての大きい発明と発見は、それじしんで伝播する……。」[43] モルガンのすべてこれらの発言は、人類史の合法則性における普遍的なものと個別的なものとの相互関係のモルガンによる弁証法的理

解をしめしている。

(38) L・H・モルガン『古代社会』、一五頁。

(39) 同上、三二頁。

(40) L・H・モルガン『古代社会』(ロシア語訳)四頁(青山訳本、上巻、二一頁)。

(41) 同上、九頁(青山訳本、上巻、三一頁)。

(42) 同上、一三頁(青山訳本、上巻、三九頁)。

(43) 同上、二六頁(青山訳本、上巻、六四頁)。

モルガン批判者たちは、モルガンの歴史構想の「単系性」を、彼の著作の基本的諸理念に――「エスノス諸時期」、すべての人類が経過する野蛮、未開、文明――の前進的な交代のなかにある人類進歩の単一性の確認のなかにみたのであった。「人類はその行路を、もっとも低い発展段階からはじめて、経験的知識の緩慢な蓄積による野蛮状態から文明への道をひらいた。[44]」モルガンは神がみによる人間の創造、その堕落、ノアの大洪水についてのキリスト教的な神学的人類学の三つのドクマから、完全にはっきりと絶縁した。モルガンの著作の全内容は、世界の後進民族の人種差別主義的な退廃論を、確固として反駁したのであった。

(44) モルガン『古代社会』、一一頁。

第三世界の諸民族は、うたがいもなく、モルガンの著作を高く評価しているが、著作のなかではつとに一〇〇年まえに、世界のすべての後退諸民族は進歩しうるとの理念が深い基礎づけをえているからである。これについてエム・オ・コスヴェンは、「モルガンによって力づよく宣言された理念の確信は、社会科学では最初に、未来の人類の創造においても、平等の地位を後進諸民族にあたえている。[45]」とかいている。

(45) エム・オ・コスヴェン、前掲書、五四頁。

モルガンのこの著作のなかでは、人類の生誕から階級社会の発生までの人類社会の進歩的発展のあゆみという歴史構想がはじめてのべられている。モルガンだけが、人類進化における氏族組織の大きい意義を発見した。まさに彼が、古代のギリシアとローマの発生的組織が、インディアン氏族の本質から理解されうることを、はじめてしめしたのであった。

モルガンの自然発生的・唯物論的方法が、階級社会の無階級、共産主義社会による交替の予見へと、彼をみちびいたのである。まさにこれによって、ヨーロッパとくにイギリスの「古典的進化主義者たち」のモルガンの著作にたいする慎重な態度が、なによりもまず解明されるのである。

◆　◆

アメリカ合州国ではL・H・モルガンの著作は、印刷物のうえで活発な反響をえた。諸雑誌や諸新聞では大きい、しばしば喜びにみちた評価がのせられた。モルガンの多くの同僚たちは個人的な手紙のなかで、彼の諸結論の肯定的な評価をのべたのであった。

イギリスではモルガンの著作は、ごくわずかの書評をよびおこした。E・タイラーはその書評のなかで、モルガンは、「そのじっさいの基礎がふくみうる以上に、より広く、よりひどく、理論的構築物をつくりあげた。彼の図式は、全体としてうけいれられないが、その部分は、人類についての学問にたいする確固たる補充となりうる。問題はただ、まさにいかなる部分であるかになる」、とかいた。

モルガンによる古典古代の氏族と、イロクォイ族やオーストラリア族の「群別」との親近性を、タイラーはまったくうけいれられないとみなした。[46]

(46) 「アカデミー」誌、一八七八年七月二〇日号、六七、六八頁。

タイラーの書評のほかに、イギリスではその当時、なおも二つの無名氏の書評があらわれた。一つは――「アテニーエム」誌での――がいして好意的であるが、その筆者はモルガンによって提起された人類古代に同意しなかった。[47] 他のものは――ロンドンの「サターディ・レヴュー」誌での――きわめて批判的であったばかりでなく、モルガンにとっては侮辱的であった。[48] L・A・ホワイトはL・H・モルガンの文書(アルヒーフ)を研究して、J・ラボックが書評の筆者であるとモルガンがみなしたということを、確認した。[49] じぶんの著作にたいするイギリスでの態度にかんしてモルガンは、イギリスの学者たちには氏族組織の本質の理解が欠けており、それで彼らはじぶんの諸結論をうけいれない、とバッハオーフェンにかいている。[50] だがF・エンゲルスは、『古代社会』の著者じしんよりもはげしく、イギリスの「公認の原始史の研究者たちによる」この著作にたいするつめたい態度を評価した。エンゲルスは「官学派はモルガンにたいして冷たく対するほかはなかった」と指摘しながら、「モルガンの諸発見は、イギリスにおいても、すべての原始社会史学者たちによって承認されているというよりも、むしろ今では横領されている。だが、諸見解におけるこのような革命が、まさにモルガンのおかげによるという明白な認識を、彼らのうちのだれにもみいだされない。イギリスでは、彼の著書はできるだけ完全に黙殺されている。個々の細部について熱心にあらさがしがされており、彼のほんとうに偉大な諸発見については固く沈黙されている。[51]」、とかいている。この点で、一九―二〇世紀のさかい目のイギリスの有名な民族学者A・C・ハッドンのモルガン著書についての評価は特徴的である。民族学史についてのじぶんの労作のなかで、モルガンを「前世紀のもっとも偉大な社会学者[52]」とよび、血族と姻族の名称諸体系についてのモルガンの「記念碑的な著作」を、家族と親族名称体系との研究のための綜合的基礎であると高く評価し、『古代社会』については、「そのなかでモルガンは、じぶんの従来の諸結論を総括し、野蛮の下、中、上の諸段階、未開の下、中、上の諸段階および文明期における文化の区分を提起した[53]」ことをかたるだけは可能であると発見したのである。みられるように、ハッドンはモルガンの『古代社会』の全意義を、そのなかでみちびきだされた歴史の時代区分、歴史の三時期区分、最初の二時期の個々の諸段階への再区分にあるとした。だが、学問の歴史がしめしているように、この時代区分は、一般的な特徴では、モルガン以前につくられていて、モルガンの功績ではない。エム・コスヴェンは、「アメリカの学者の大きい功績は、彼が原始の時代区分を物質的基礎のうえにおいたことにある[54]」、と正しく指摘した。ハッドンは、イギリスのそのほかの同僚たちとおなじく、原始社会の基本的な構造単位としての、氏族的な原始共産主義的なものとしてのこの社会の特徴づけでの、モルガンによる母系氏族の発見のような、もっとも大きいモルガンの功績についても黙殺した。私有財産の発生と発展についてのモルガンの分析は、「官学派の」イギリス学者たちを、とくに嫌悪させた。さらにエンゲルスが指摘したように、L・H・モルガンがアメリカ人であった

ということも意味をもっていた。「官学派がひややかに無視の態度をとらざるをえなくするほどの犯罪ではなかったとしても、彼が文明を――商品生産の社会を、現代社会の基本形態を――、フーリエを思わせるような批判をしたばかりでなく、さらに、この社会のきたるべき変革について、カール・マルクスがいいそうな表現で語って、彼が度をこしてしまった。だから、マクレナンが憤慨して、『彼は歴史的方法にまったく反感をいだいている』とモルガンに非難をあびせ、ジュネーブの教授テューロン氏が一八八四年にこれを確認したのは当然であった。」[55] それにしても、その当時に家父長説の主要な擁護者であるH・メーンが、『古代社会』の全内容を反駁し、モルガンの基本的結論に批判的であったが、学者としての彼にたいしては大きい尊敬をもっていたことを指摘しなければならない。[56]

(47) 「アテニーエム」誌、一九七七年一二月二三日号、八六七、八六八頁。

(48) 「サターデー・レヴュー」誌、一八七八年一月五日号、二〇頁。

(49) L・H・モルガン『古代社会』へのL・A・ホワイトの序文、前づけ二二頁。

(50) 同上、三一頁。※

(51) 『マルクス、エンゲルス著作集』、第二二巻、二三五、二三四頁〔『マルクス・エンゲルス全集』、第二二巻、二二七―二二八頁〕。

(52) A・C・ハッドン『人類学史』、ロンドン、一八四九年、一二七頁。

(53) 同上、一二九頁。

(54) エム・オ・コスヴェン、前掲書、四七頁。

(55) 『マルクス・エンゲルス著作集』、第二二巻、二二四、二二五頁〔『マルクス・エンゲルス全集』、第二二巻、二二九頁〕。

(56) H・S・メーン『古代法と慣習』〔ロシア語訳〕一八八四年、一四七―一七四頁。

※ 拙編訳『モルガン「古代社会」資料』二八八頁にこの手紙が邦訳されている。

フランスのE・ルクリュがモルガンの著作について立派に評価し、スイス人J・バッハオーフェンがモルガンへの諸手紙のなかで、原始史の「体系的な認識への貴重な寄与」にたいして大きい感謝をあらわした。[57] 彼はその著作『古代書簡』をモルガンにささげた。[58] L・H・モルガンの研究にたいする生き生きした反響が、一八七〇年代のロシアのナロードニキたちのあいだでみいだされた。集団的所有にもとづいた氏族的社会としての原始社会についての概念は、エヌ・フレーロフスキー（ヴェ・ヴェ・ベルヴィ）、ペ・エリ・ラーフロフ、エス・カ・ミハイロフスキーのような人民主義の有名な代表者たちの諸労作のなかで進展させられた。[59]

(57) B・J・スターン、前掲書、一四五―一五一頁に公刊された諸手紙をみよ。※

(58) J・J・バッハオーフェン『古代書簡、とくに最古の親族概念の理解のために』二巻、シュトラースブルク、一八八〇―一八八六年。

(59) エヌ・フレーロフスキー『社会科学のABC』、セント・ペテルブルグ、一八七一年。ペ・エリ・ラーフロフ『相互的

人間関係の原始的形態』、セント・ペテルブルグ、一八七二年。エヌ・カ・ミハイロフスキー『個性のための闘争。家族』、セント・ペテルブルグ、一八七六年。

※　これらの手紙は『バッハオーフェン全集』第一〇巻、一九六七年に、完全な形でおさめられているが、『モルガン「古代社会」資料』二五四頁をみよ。

エム・オ・コスヴェンはその母権の諸問題の歴史についての有名な研究書のなかで、ロシアの学者たちのL・H・モルガンの著作にたいする関係を、われわれにしらせている。ロシアではこの著作は、彼の言葉によると、「ただちに知られるようになり、普及し、認められた。[60]」エム・オ・コスヴェンは「ロシアは、彼の学説がうけいれられ、独創的な前進的な検討をうけた唯一の国であったし、そうである[61]」としている。すでに一八七八―七九年に、デ・ア・コロプチェフスキーの二つの論文が発表され、それらのなかでモルガンの著作の大部分がくわしくのべられている。[62]しかもエム・オ・コスヴェンは、モルガン学説の影響のもとにおこなわれたヴェ・ヴェ・ソコリスキー、エヌ・イ・ジーベル、ヴェ・デ・エフィーモフ、エム・エム・コヴァレフスキーの四人のロシアの学者の独創的な研究をしめしている。[63]L・H・モルガンの理念はゲ・ヴェ・プレハーノフによって高く評価された。[64]

(60)　エム・オ・コスヴェン『母権。問題の歴史』、モスクワ、レニングラード、一九四八年、一九七頁、二〇七頁。

(61)　同上、二〇七頁。

(62)　デ・ア・コロプチェフスキー『古代社会における氏族的原理』――「スローヴォ」誌、一八七八年第一一―一二号。同『古典古代の諸民族における氏族諸制度』――「スローヴォ」誌、一八七九年、第五―六号。

(63)　ヴェ・ヴェ・ソコリスキー『主としてケルト族とゲルマーニー族の原始社会での家族と血族の組織についての学説によせて』――「文部省雑誌」一八八一年、第四、七号。エヌ・イ・ジーベル『原始経済文化概要』、セント・ペテルブルグ、一八八三年。ヴェ・ヴェ・エフィーモフ『古代ローマの血縁と相続の歴史の概要』、セント・ペテルブルグ、一八八五年。エム・コヴァレフスキー『原始法』、モスクワ、一八八六年。L・H・モルガンの著作の最初のロシア語訳は、エム・コヴァレフスキーの序文づきで一九〇〇年に刊行された。

(64)　たとえば、ゲ・ヴェ・プレハーノフ『芸術と文学』、モスクワ、一九四八年。ゲ・ヴェ・グーセフ『原始社会とその文化についてのプレハーノフ』――「ソヴェト民族学」誌、一九五二年、第四号をみよ。

結局、モルガン『古代社会』は、アメリカ合州国とロシアにおける彼と同時代の多数の学者によって、そしてまた西欧の個々の研究者たちによって、肯定的に評価された。だが、この著作にもっとも正しくて高い評価をあたえたのは、マルクス主義の創始者たちであった。F・エンゲルスは、モルガンの研究を「画期的な著作」とよんだ。[65]「原始的な社会状態については、生物学でのダーウィンのように、決定的な意義をもっている大きい著作があります。それを発見したのは、もちろん、やはりマルクスです。これはモルガン『古代社会』の一八七七年です……[66]」、と一八八四年にエンゲルスはかいている。この著作の著者については、マルクス主義の創始者たち

は、人類史の先階級時代についての学問において革命をおこなった学者について、その著作の刊行によって「原始史研究に新しい時代がはじまる」[67]、とかいている。F・エンゲルスは、モルガンによる「文化諸民族の父権のもとづく氏族に先行する段階としての母権にもとづく原始的氏族」の発見が、どれほど最大の学問的な意義をもっているかを理解した、その当時での最初の、唯一の人であった[68]。だがエンゲルスは、原始についての学問へのモルガンの寄与を高く評価しながら、学問的知識の蓄積が、モルガンによってだされた諸命題に修正をもたらすことを、その当時に予見した。たとえば、モルガンによってあたえられた原始社会史の時代区分について、エンゲルスは「モルガンは知識によって人類の前史に一定体系をもちこむことをこころみた最初の人であった。そして資料のいちじるしい拡大が、変更をもたらすまでは、彼によってのべられた時代区分はうたがいもなく有効である」[69]とかいたのである。すでに『家族、私有財産および国家の起原』第四版序文のなかで、『古代社会』の刊行のときから一四年のあいだの、原始についての学問の達成についてのべながら、エンゲルスは新しい諸資料の蓄積の結果、「モルガンのいくつかの個々の仮説は……動揺し、あるいはくつがえされさえもした。だが、あたらしくあつめられた資料が、彼の本質的な諸命題を別のものととりかえることを必須としない。彼によって原始史にもちこまれた体系は、大綱においては今まで有効である」[70]、と指摘したのであった。

(65) 『マルクス・エンゲルス著作集』、第二一巻、二五頁〔戸原訳本、一頁〕。

(66) 『マルクス・エンゲルス書簡選集』、モスクワ、一九四八年、三七二頁※。

(67) 『マルクス・エンゲルス著作集』、第二二巻、二二三頁〔『マルクス・エンゲルス全集』、第二二巻、二二七頁〕。

(68) 同上、二二三頁〔同上、二二七頁〕。

(69) 同上、第二一巻、二八頁〔同上、第二一巻、二九頁〕。

(70) 同上、第二二巻、二二五頁〔同上、第二二巻、二二九頁。戸原訳本、二八頁〕。

※ 『マルクス・エンゲルス全集』、第三六巻、九九―一〇〇頁の一八八四年二月一六日づけのエンゲルスのカウツキーあての手紙によまれる。

◆　◆

モルガンの著作が刊行されてから一〇〇年たった現在、考古学的、民族学的、人類学的な巨大な資料が蓄積され、モルガン学説のいくつかの命題の再検討を不可避にしている。だが、彼の著作の基本的な諸命題は不動のままであったばかりでなく、新しい諸資料によって立派に確認されている。修正のあらゆる可能なこころみにもかかわらず、モルガンの時代区分は、今日の学問にとって意義をうしなっていない。ソヴェトのすぐれた民族学者エス・ペ・トールストフがかいているように、「モルガンの時代区分は、まさに時代の修正にたえているので、その大綱では、具体的な人類史の考古学的に確定された大きい諸時代にまったく照応している。」[71]別の労作のなかでエス・ペ・トールストフは、「考古学的な時代区分の六期は、モルガンの時代区分の六期にまったく照応している」[72]、と指摘した。モルガンの著作の基本的な諸命題の学問的な意義の認識とな

らんで、学問の発展過程であらわれた新しい諸資料によって指示された本質的な修正を、ソヴェト学者たちは、彼の時代区分にもちこんだのである。もっとも重大な意義をもっているのは、原始史の最初段階と最終段階の特徴づけにおける変更である。「エスノス諸期」のさかい目としての「諸発明と諸発見」の歴史のモルガンによる解釈に、修正がもちこまれた。たとえば、火の発見と漁撈に、モルガンは野蛮の下期と中期のさかいをみた。最新の考古学的資料にもとづいて、火はすでにシナントロプスにしられていた、と今では確認された。ソヴェト学者たちは、主導的な経済部門としての漁撈を、新石器時代のものとし、それの出現は弓矢の発明の時期としている。土器製作の発明に、モルガンは二つの「エスノス期」――野蛮と未開の必然的なさかいをみた――このために、土器製作をもたないポリネシア族と北西海岸※のインディアンを、まちがって野蛮期にぞくするとした。現在の知識にもとづいてソヴェトの学者たちは、土器製作の発明を農耕の発生とともに、新石器時代のものとしたが、この発展段階にあるすべての民族がこれらの「発明と発見」をしってはいないことをみとめた。新石器時代の多くの部族では、農耕ではなくて、定住的漁撈が生存の基礎であった。オーストラリア族とアメリカのいくつかの部族は、弓矢をもたずにブーメランや吹矢のような、すくなからず独創的な発明をもっていた。未開と文明（すなわち階級社会）とのさかいを、モルガンは鉄加工の発明にみた。新しい学問的な資料は、鉄ではなくて、銅、青銅のような金属が先階級社会の歴史をおわらせていることを確信的にしめした。これにかんれんして、W・ロバートソンが、モルガンの一〇〇年まえにかかれた上述の著作のなかで、とくに鉄の発明ではなくて、金属一般の発明に、未開と文明のさかいをみたことを指摘するのは興味ふかいことである。

(71) エス・ペ・トールストフ『原始社会史の時代区分の問題によせて』――「ソヴェト民族学」誌、一九四六年、第一号二五頁。

(72) エス・ペ・トールストフ『K・マルクスとL・H・モルガン』――「ソヴェト民族学」誌、一九四六年、第二号、二四六頁。

※ 北アメリカの北西海岸にすむ諸部族のことで、「北西インディアン」とよばれている。たとえば戸原訳本、二一〇頁原注をみよ。

エス・ペ・トールストフが正しく指摘したように、モルガンの時代区分には、社会諸関係の歴史とむすびついている原始史の主要諸要素が十分には分出されていない。「野蛮期（獲得経済）と未開期（生産経済）との区分は、原始共同体制度の繁栄の時期を……この社会制度の成立の段階、人間じしんがつくられる時期と区別し、原始共同体のわくのなかで成長した生産諸力が原始的生産諸関係をこわすときである原始共同体制度の崩解の時期を区別する二つの別の質的なさかいを、後方へおしやっている[73]」、とエス・ペ・トールストフはかいている。F・エンゲルスはその諸著作によって、モルガンの時代区分のこの欠点に、いちじるしい修正をもちこんだ。その古典的な著作『家族、私有財産および国家の起原』のなかで、「未開と文明」という特別の章を、エンゲルスは原始社会史のさいごの過渡段階の本質の分析にささげた。論文『猿の人間への転化過程における労働の役割』のなかで、エンゲルスは人類史の最古の段階（モ

ルガンの野蛮下期に照応する）の特徴づけをあたえ、その本質は人間の定立の過程であったことをしめした。エンゲルスはこれらの諸著作の刊行のときから、考古学的および民族学的な豊富な資料が蓄積されて、それらの著作のなかでのべられたエンゲルスの基本的な諸命題が確認され、野蛮の下期と中期とのあいだの真のさかいは、現代型人間の確立と人類社会の二分＝氏族組織※の成立の完成であることがはっきりとしめされている。

（73）エス・ペ・トールストフ『原始社会史の時代区分の問題によせて』、二二五頁、二二六頁。ユ・イ・セミョーノフ『いかに人類が発生したか』、モスクワ、一九六六年。同『モルガン学説、マルクス主義と現代民族学』――「ソヴェト民族学」誌。一九六四年、第四号。

※　一部族が二つの氏族からなりたち、この二つの氏族が二つの半族（$\frac{1}{2}$族）となって部族の二分（または双分）組織 dual organizationをつくる。$\frac{1}{2}$族（氏族）＋$\frac{1}{2}$族（氏族）＝1部族。自分にぞくしている一半族がじぶんの血族集団であれば、他の半族は姻族集団であり、他の半族の異性と婚姻するという族外婚の規律がある。部族のなかで婚姻しなければならないという部族の族内婚規律と照応している。

そしてまた、モルガンによってつくられた家族・婚姻諸関係の図式に一定の諸修正がもちこまれた。ソヴェトの学者たちは、原始的群と氏族とのあいだの中間的諸段階としての血族家族とプナルア家族についてのモルガンの仮説に同意していない。彼らは、乱婚をもっている原始的群は、中間諸段階なしに、直接的に二分＝氏族組織に転化したし、また婚姻は個々の個人たちのあいだではなくて、血縁的諸集団のあいだの諸関係の確立を本源的に意味した、とみなしている。それは集団的な性格をもっていた。それとともに、ソヴェトの学者たちは、血族家族とプナルア家族とについてのモルガンの諸命題をくつがえして、乱婚から集団婚をへて対偶婚へ、ついで一夫一妻婚への家族・婚姻諸関係の発展についてのモルガンの基本的な考えを採用している。[74]

（74）ユ・イ・セミョーノフ『婚姻と家族との起原』、モスクワ、一九七四年をみよ。

モルガンの原始史の時代区分の学問的意義を、時代区分のなかでの個々のまちがった諸命題が存在するために、皮相的に否定するところみを非難するエス・ペ・トールストフはうたがいもなく正しかった。[75]

（75）エス・ペ・トールストフ『K・マルクスとL・H・モルガン』、二四六頁。

モルガンの著作の学問的意義を総括して、モルガンによる原始時代の再建は、そのもっとも重要な環では正しかったことを、考古学と民族学の分野での新しい諸発見がしめした、ということができる。学問の現状にくらべて、わずかな諸資料をもちながら、彼が以上のことを達成したことに、ただおどろかねばならない。これはモルガンの歴史的方法の正しさについて語っているのである。現代の知識にてらしてみると、たとえば生産諸力の発展によって規定される原始人類の進歩的発展の基本的諸段階の確定というようなモルガンのもっとも重要な諸発見、最初から普遍的である原始社会の組織の型としての母系氏族の発見、原始の社会生活の原始共産主義的基礎の確定、さいごに分業、私有財産や社会不平等や搾取（奴隷制）

の出現につれて氏族制度の古代的諸形態がくずれ、集団婚と対偶家族が家父長的家族と一夫一妻婚家族に場所をゆずり、母系出自が父系出自に場所をゆずり、さいごに氏族組織そのものが国家場所をゆずって解体するという規定は、ゆるがなかった。

◆　◆

モルガンの著作『古代社会』のなかでのべられた彼の見解の社会・経済的および政治的な諸前提は、ソヴェトや外国の文献のなかで、すでになんども批判的分析をうけたが(76)、それがわれわれの任務をいちじるしく軽減し、そして複雑にしている。

(76) エム・オ・コスヴェン『L・H・モルガン。生涯と学説』。ユ・イ・セミョーノフ『L・H・モルガン。伝説と現実』――「ソヴェト民族学」誌、一九六八年、第六号。B・スターン、前掲書。L・A・ホワイト『ルイス・ヘンリー・モルガン。社会進化学説の先駆者』――『社会学史序説』、シカゴ、一九四八年。同『いかにモルガンは「血族と姻族の名称諸体系」をかくにいたったか』。C・レセック『ルイス・ヘンリー・モルガン。アメリカの学者』、シカゴ、一九六四年。E・テレイ『モルガンと現代人類学』――『マルクス主義と「原始」社会』。R・ロウィ『歴史的展望におけるルイス・ヘンリー・モルガン』――『A・L・クローバーにささげられた人類学論集』、バークレー、一九三六年。F・エガン『L・H・モルガン』――『レスリー・A・ホワイトにささげられた文化科学論集』、ニューヨーク、一九六〇年。などをみよ。

モルガンの社会的・政治的見解は、アメリカ合州国史の嵐の時代につくられた。一九世紀中ごろのアメリカ合州国における産業資本主義の急速な発展は、その時代の階級諸関係における、そしてイデオロギーにおける、諸変化をともなった。一九世紀前半のイデオロギー風土は、一八世紀の哲学者・啓蒙主義者たちからうけつがれ、あらゆる変種の退歩と、人種差別主義の反動的な諸学説に反対するアメリカ社会の進歩的諸層によってもたれた進歩の理念の闘争によって特徴づけられた。これは人類多元論者たちと人類一元論者たちとのあいだの、黒人排用者たちと奴隷制廃止論者たちとのあいだの、進歩学説擁護者たちと退歩学説擁護者たちのあいだの、はげしい論争の時期であった。

この時期のアメリカのインテリゲンチャの自由主義諸層に、フーリエとオーエンの空想的社会主義学説が、深刻な影響をあたえた。アメリカ合州国の進歩的思考におけるこれらすべての潮流は、その時代の嵐のような諸事件にたいして生き生きと対応したモルガンの諸見解に影響した。モルガンが民族学者であったばかりでなく、政治家であったという事実は注目に価する。彼は「象牙の塔」の壁のなかにとじこもらず、社会・政治生活に積極的に参加した。すでに大学での勉強の年月に、モルガンの社会的な志向がしめされたのである。彼は、フリーメーソン支部にならってつくられた青年の文学的サークル「ゴルディアースの結び目」の組織者たちの一人であった。ついで彼の首唱によって、このグループは「インディアンにたいする友好関係を国民にうえつける」ことを目的とした「イロクォイ族のグランド・オーダー」に、イロクォイ族の連盟の構造様式にならって、再組織された。「オーダー」の活動が中絶したのち、モルガンは一八五四年に「パンディト・クラブ」をつくり、そこで彼

は、彼を興奮させた学問的、社会・政治的な諸問題についての講義をおこなった。モルガンのそのごの全生活は、学問の舞台でも、国の社会・政治的生活でも、嵐のような活動でみたされた。彼の学問的な目的は、抽象的な性格をおびていなかった。彼のすべての学問的な志向は、よりよい未来への人類社会の進歩的発展の参加者たちとしての諸国民の平等を証明することにむけられたのであった。

モルガンはアメリカ合州国の学術諸機関の事業に積極的に参加した。すでに一八五七年に彼は、その当時の指導的な国の学術協会――アメリカ学術振興協会の会員になっている。一八七五年に彼は、この協会に民族学部会をつくり、そのチェアマンとなり、四年ごには協会ぜんたいの総裁にえらばれた。一八七五年にモルガンはナショナル科学アカデミーの会員にえらばれた。これら二つの選出は、その当時のアメリカ合州国の学者の科学的貢献を最高にみとめたことであった。

モルガンの政治活動についてかたっているのは、一八六一―一八六八年のニューヨーク州下院に、当時わりと進歩的な立場にたっていた共和党からえらばれたことであり、一八六八―六九年にこの党からの上院議員になっている。

だが、二〇世紀のはじめには、学者としての、そして政治家としての、L・H・モルガンの貢献を認識することはわすれられてしまった。これがおこったのは偶然ではない。

原始についての学問での進化主義学派の優勢は、資本主義の嵐のような発展の時期と一致していた。L・H・モルガンの名とむすびつけられたこの学派の基本的な諸命題は、一八九〇年代までアメリカ合州国の民族では有力であった。だが、ブルジョア的社会学的思考の危機や、反動的立場への思考の堕落をともなった資本主義の帝国主義的段階への移行は、ブルジョア的民族学の状態にもおよばざるをえなかった。一九世紀末から、この学問の代表者たちは、進歩の理念、人類社会の歴史的発展の合法則性に反対し、その唯物論的解明に反対する「批判的」立場を表明している。アメリカ合州国の民族学におけるこの闘争では、反進化主義的な、いわゆる「歴史」学派がつくられた。この学派の支配の四〇年のあいだに、その代表者たちは学者としてのモルガンを、全力をつくして誹謗し、彼の諸結論を嘲笑した。たとえばR・ロウィは一九一五年に、モルガンは「制約された弱い知性の典型的な権化」であったと、また『古代社会』では彼は「高度の不合理」[77]にたっしているとかいている。P・ラディンが指摘したように、「F・ボーアスのすべての弟子たちにとってはモルガンは呪詛であり、だれも彼の著作をよまなかった。」[78]

(77) 「アメリカン・アンスロポロジスト」誌、一九一五年、第一七巻、三三〇頁。

(78) 「ニューレパブリック」誌、一九三九年、第九八号、三〇〇頁。

モルガンの諸発見をくつがえすことに、ブルジョア的民族学者たちの主要な努力がむけられた。モルガンの自然発生的・唯物論的方法がブルジョア的民族学の進化主義とまったくちがっており、歴史唯物論にちかかったにもかかわらず、モルガンの諸発見を中傷するために、モルガンはふるくさくなった進化主義的理論の「老朽した」代表者である、と宣言された。この年代のブルジョア民族学者たちの理論的諸著作の大多数は、ある程度はマルクス・レーニン的学問によってうけいれられたモルガンの諸発見をくつがえすこと

に、主としてむけられた。これらの諸労作のそれぞれでは、モルガンの諸発見は、最新の経験論的な諸研究によって完全にうちやぶられたことが表明された。たとえばJ・ステュワールトは、「一九世紀の進化主義たちの歴史的復元は、経験論的基礎にもとづいて完全に失墜させられた[79]」、とかいたのであった。

(79) J・ステュワールト『文化変容の理論。多系的進化の方法論』、アーバナ、一九五五年、一一頁。

だが、その当時のC・ウィスラーにとっては、モルガンは「偉大な天才[80]」であったが、一九三〇年代からは、L・A・ホワイトがモルガン擁護のために、徹底的にあらわれはじめた。すでに一九三二年にL・A・ホワイトは「彼（モルガン――ユ・ペ）はいまではくつがえされ、みとめられず、侮辱され、嘲笑されているが、彼の偉大さが完全に評価されるときがくるだろう。モルガンの名は、その批判者たちが死人で忘れられたあと、長く輝くだろう[81]」、と予言的にのべた。そのようになった。

(80) C・ウィスラー『人類学における最近の発達』――E・C・ハース編『社会科学における最近の発達』、フィラデルフィア、一九二七年、五五頁。

(81) レスリー・A・ホワイト『文化の進化とアメリカ歴史民族学派』――「ソヴェト民族学」誌、一九三二年、第三号、六七頁。

第二次大戦の終結ごにおける、社会主義革命や民族解放革命の成功、帝国主義と植民制度の崩壊は、全ブルジョア・イデオロギーの深刻な危機をよびおこした。ブルジョア的社会学を支配していた反歴史的経験論と不可知論は、世界でおこっている嵐のような過程の死滅という必然性のまえでは、無防衛であることがわかった。これが、ブルジョア民族学でひろくおこなわれていた理論的ニヒリズムの批判的再検討を、世界でおこっている革命的再改造を解明することができる理論の探求を、もたらさざるをえなかった。この学問の代表者たちは、理論の探求の道にたって、なによりもまず、その直接的な先行者たち――二〇世紀前半に彼らが批判した「一九世紀の進化主義者たち」の歴史構想にふりむいたのである。

四〇年代からは、モルガン批判の軟化が、彼をアメリカ民族学の父[82]とみとめる従前の評価の再検討が、すでにみられるのである。五〇年代には、モルガンにたいする関係の再検討の傾向が増大している。この点できわめてはっきりしているのは、M・ハースコヴィチのアメリカ人類学協会総裁の職への一九五八年における就任のさいの報告であるが、それは一種のモルガン復権であり、アメリカ民族学における「歴史」学派の指導的代表者の一人によるモルガンの学問への貢献を認識することである。ハースコヴィチの基本的結論は、モルガンが民族学を科学とし、それに科学的方法をあたえたということであった。モルガンのいくつかの結論と方法は、彼の主要な諸発見をのぞいて、有益であるとみとめられている。

(82) W・フェントン『北アメリカ歴史人類学論文集』、ワシントン、一九四〇年。R・ビールス、H・ホイジャ『人類学入門』、ニューヨーク、一九五四年。

モルガンの著作『古代社会』ではなくて、『血族と姻族の名称諸体系』の学問的意義がしばしば強調されている。これにかんれんして、モルガンを親族名称体系の研究の創始者、一般的に社会人類学の創始者とみている。この点できわめて同情であるのは、すぐれた

アメリカの民族学者F・エガンの、「モルガンは、彼の批判者たちよりも、現代の科学に近い」[83]、との宣言である。『古代社会』でのべられたモルガンの理念にたいする関心は、Ch・ダーウィンの著作『種の起原』の刊行一〇〇年記念にささげられた一九五九―一九六〇年の記念集会とかんれんして、とくに活発となった。これらの集会そのもので、アメリカ合州国の理論民族学における、歴史学派の反歴史主義から発展の理念の認識への転回、社会進化論への転回について、証明している。一九六一年にC・レゼックの著書『L・H・モルガン。アメリカの学者』が刊行されたが、そのなかで民族学にたいするモルガンの巨大な貢献がみとめられている。一九六三年と一九六四年に、上述したように、アメリカ合州国でモルガンの著作『古代社会』の二つの新しい版が刊行されたが、それらの編集者たちであるE・バーク・リーコックとL・ホワイトの大きい序文をもっている。[84]

(83) F・エガン、前掲書。

(84) C・レセック、前掲書。

二人の学者はそれぞれの序文のなかで、人類の一元についてのモルガンの著書の基本的理念の、基準からずれているか、または退歩しつつある人びととしての後進諸民族の記述に反対するモルガンの発言の、反人種主義的傾向を強調しているが、L・ホワイトもE・リーコックも、モルガンの時代区分は、細部での個々のまちがいにもかかわらず、いまでも意義をうしなっていないことをみとめている。彼らは、氏族についてのモルガンの学説の科学的意義を強調しているが、家族進化の彼の構想は、序文の筆者たちにはこの問題でのいくらかの不一致があるとはいえ、新しい諸資料によってうちやぶられていることをみとめている。[85] 一般的に、二人の編集者は、原始社会史の研究でのモルガンの寄与を高く評価している。一九七一年にP・マカリウスの編集とその長い序文をもっている、モルガン著作のフランスでの学問史での最初の翻訳の刊行の事実は、注目にあたいする。[86]

(85) ユ・ペ・アヴェルキエヴァ『L・H・モルガンと二〇世紀におけるアメリカ合州国の民族学』――「歴史の諸問題」誌、一九六八年、第七号。

(86) L・H・モルガン『古代社会』〔フランス語訳〕パリ、一九七一年。

モルガンが一八四四年から一八八一年の死去まで住んでいたロチェスター市の大学で、一九六三年にはじめられたモルガン講義も、偉大なアメリカの学者の令名の復活をものがたっている。これらの講義に、すぐれた学者たちが参加しているが、民族学へのモルガンの学問的な寄与のさまざまな側面の、現在の資料にてらしての分析に、じぶんたちの講義をささげている。これらの講義は、個別的な著作として刊行されている。たとえば、一九六六年にF・エガンの本が刊行されたが、[87] それは「モルガンとアメリカ・インディアン」というテーマで彼によってなされた連続講義であり、そのなかではインディアンの民族学的研究の創始者としてのモルガンの寄与が強調されている。イギリスの学者であるM・フォーテスによって講義された親族関係の研究へのモルガンの寄与についての連続講義も、個別的著作のかたちで刊行されたのであった。[88]

(87) F・エガン『アメリカ・インディアン。社会変容の研究のための展望』、シカゴ、一九六六年。

(88) M・フォーテス『親族と社会秩序。ルイス・ヘンリー・モルガンの遺産』、ロンドン、一九七〇年。

このようにして、『古代社会』刊行のときから一〇〇年たって、モルガン学説は彼の祖国では複雑な歴史、すなわち認知、反駁、再認識を生きてきた。この学説の複雑な運命の最大の原因は、うたがいもなく、先階級社会についての彼の基本的な諸命題の、マルクス・レーニン的学問による認知である。

モルガンの学問的寄与の認識へ、西欧の学者たちが転換したことのあらゆる徴候を一般化して、いまでは死去してしまったL・ホワイトは、「さいごに、民族学のすぐれた先駆者、哲学者、予言者は、科学的思考の歴史のなかで正当にその地位をえており、彼の構造論的達成は、民族学諸研究の主流にもどった[89]」、とかいたのであった。

(89) L・H・モルガン『古代社会』へのL・A・ホワイトの序文。前づけ四二頁。

訳者あとがき

これは「L・H・モルガン『古代社会』刊行一〇〇年によせて」という副題をもち、ユ・ペ・アヴェルキエヴァによって「ソヴェト民族学」誌、一九七八年、第一号に発表された論文『現代民族学の源』の全訳である。

今年はモルガン死去一〇〇年、そしてまた『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』刊行一〇〇年にあたるので、いずれは、その国でも記念論文が発表されるにちがいないと思うが、とりあえずはこの機会に、このアヴェルキエヴァ論文を訳出することにした。この論文は三年ほどまえのものとはいえ、いまでも読まれねばならないものであり、しかも一九七七年の『古代社会』の刊行八〇年を記念するデ・ア・オリデロッゲの論文（「ソヴェト民族学」誌、一九七八年、第一号）とともに、貴重なものであるからである。

このオリデロッゲの論文については、「歴史学研究」誌一九八一年三月号での拙文を、そしてアヴェルキエヴァについては、「思想」誌一九四八年一一月に発表した拙稿『ロシア民族学の展望』（拙編訳『モルガン「古代社会」資料』一九七七年におさめられている）をみよ。彼女の著書『北アメリカ・インディアンにおける奴隷制度』については「民族学研究」誌一九四九年一三巻四号と、「歴史学研究」誌一九七六年二月（このときの論文『籍帳における父系的兄弟的家族共同体』は『家族共同体論』と改題されて拙著『原始共同体研究』一九八〇年におさめられている）とをみていただきたい。

アヴェルキエヴァ女史を悼む

ユリア・パフロフナ・ペトロヴァ＝アヴェルキエヴァは惜しくも一九八〇年一〇月九日に死去した。「ソヴェト民族学」誌一九八〇年六号での三頁にわたる追悼文によって知ったのであるが、一九〇七年七月二四日生れであるから、七三歳であった。

一九四一年に刊行された彼女の第一の著書『北アメリカ・インディアンにおける奴隷制度』をしったのは、敗戦のすぐあとであるが、すぐれた民族学者であり、すばらしい研究書であると、ただおどろくばかりであった。

いつとはなしに、彼女が「ソヴェト民族学」誌の編集長であることをしったが、この職についたのは一九六六年である。そしてまた、いつとはなしに、彼女の姓に「ペトロヴァ」がつけくわえられて、ペトロヴァ＝アヴェルキエヴァとなっているのに、気がついた。

彼女はフィンランド東部のカレリア森林地帯の小さい村の農家にうまれた。一九二五年にレニングラード大学地理学部民族学科に入学し、タン＝ボゴラスとエリ・ヤ・シュテルンベルグの指導をうける。

大学を卒業した彼女は、アメリカのコロンビア大学へ派遣された。そこで反モルガンであるフランツ・ボーアスの指導をうけ、そして一九三〇年秋に、彼が主宰する六か月にわたるバンクーバー島のクワキュトル族の調査に参加した。このときの成果がまとめられて、博士論文となり、ついでさきの著作『……奴隷制度』となったのである。

彼女は一九七五年からは民族学研究所のアメリカ諸民族部門の主任となったが、「ソヴェト民族学」誌編集長の現職のまま、この世をさったのである。彼女の著作目録は「ソヴェト民族学」誌一九七七年六号に発表されたが、それからあとの労作は、このたびの追悼文のなかにしめされている。

わたしは彼女のものを訳したことがなかった。ここではじめて邦訳した彼女のモルガン『古代社会』一〇〇年記念論文が、くしくも彼女をも悼むものともなってしまった。いずれはモルガン死去一〇〇年を記念する論文が、彼女によってかかれるにちがいないと期待していたのではある。

彼女の諸著作からうけた学思を謝して、ここにつつしんで深く哀悼する。

モルガンをよむ

林　葉子

「ブリタニカ百科事典」第一五巻（一九五一年刊）にある表題を含めて二二行の「モルガン・ルイス・ヘンリー（一八一八―一八八一）」項をつぎに直訳する。

「アメリカの民族学者で、一八一八年一一月二一日に、オーロラ（ニューヨーク州）の近くに生まれた。彼は一八四〇年にユニオン・カレッジを卒業し、弁護士開業の許可をあたえられ、ロチェスター（ニューヨーク州）で開業した。彼のイロクォイ部族への関心が彼を、彼らのなかで生活させ、彼らの社会組織を研究した。一八四七年一〇月に彼は正式にセネカ部族の鷹氏族に養子とされ、Ta―ya―da―o―wub―rub の名を受けた。彼の研究の成果は、『イロクォイ族の連盟』（一八五一年刊。新版は一九〇四年刊と一九三二年刊）であった。この本の成功に励まされてさらに研究し、『血族と姻族の名称諸体系』（一八六九年刊）がつくられた。一八七七年に彼は『古代社会、または野蛮から未開をへて文明にいたる人類進歩の経路についての研究』を刊行することによって、その名声をたかめた。モルガンは一八六一年にニューヨーク州の下院議員、そして一八六八―六九年には上院議員であった。一八八〇年には彼はアメリカ学術振興協会の総裁になった。彼は一八八一年一二月一七日、ロチェスター（ニューヨーク州）で死んだ。上記の諸著作のほかに、彼は『アメリカ・ビーバーとそのいとなみ』（一八六八年刊）と、『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』（一八八一年刊）を出版した。W・H・ホルムの『L・H・モルガン伝記的回想』（一九〇八年刊）をみよ。」

この文章のうち、(1)モルガンの「イロクォイ部族」とあるのは「イロクォイ族」のはずである。六つの部族があつまってイロクォイ族をつくるからである。(2)モルガンがイロクォイ族の中で生活したとあるが、これはまちがっている。セネカ部族鷹氏族に養子にむかえられただけである（これによって名誉市民の待遇をえたことになる）。(3)モルガンの著作『血族と姻族の名称諸体系』は『人類家族の血族と姻族の名称諸体系』であって、「人類家族の」が欠けている。(4)またこの著作が刊行されたのは、一八六九年ではなくて一八七一年である。

なお「ブリタニカ国際大百科事典」日本語版第一九巻（一九七五年刊）三六九頁から三七〇頁にかけて、表題をのぞき七〇行一七五〇字を使った「モルガン・ルイス・ヘンリー」項がある。これは蒲生正男氏の執筆である。ここでは「インディアンの文化と社会の理解を目標とした多くの著作や論文を発表し、なかでも『古代社会』（一八七七）は人類学史上の金字塔であるばかりでなく、広く社会

科学の古典の一つとみなされている」こと、更にモルガンの人類学理論（民族学理論）の大要と、その評価についてのべている。「『類別的体系』とは直系の縁者（たとえば父）と傍系の縁者（たとえば父の兄弟）を一つの言葉で類別するものであり、『記述的体系』とは、直系と傍系を一つの言葉で類別することが決してないものである。この二つの範疇から、インディアンと白人とのこえがたい断絶としてではなく、根源と経験と進歩において、一つの人類として、総合的に把握する鍵を見出そうとした」のであり、「このことから文明社会に一般的な一夫一婦婚に先行する過去の慣習として、集団婚を想定すれば、婚姻の進化に付随する発展段階の差として『類別的体系』を理解できるものとした」とし、「集団婚から一夫一婦婚への進化的発展」を『古代社会』のなかでえがいたとかいている。

だが集団婚から一夫一妻婚（一夫一婦婚というよりもこのましい）への発展というのは、モルガンの発展図式とちがっている。正しくはモルガンによると、乱婚→血族婚→プナルア婚→対偶婚→一夫一妻婚という発展図式である。そのごの研究によると、血族婚とプナルア婚とを復元する必要がないとされ、今では乱婚→集団婚→対偶婚→一夫一妻婚の発展とされている。

モルガンの没後百年になるが、不幸にしてその学説の正しい紹介は少ない。「アンチモルガニアンも、モルガニアンも、民族学者はもちろん、歴史学者も考古学者もが、いま一度モルガン学説の理解そのものと、現段階における再評価のための研究を、徹底的におこなうことがもとめられている」と、『原始共同体研究』（一九八〇年未来社刊）のなかで、布村一夫教授はいっている。また「原始社会は、母権的な人間関係にもとづいていて、支配と隷属をしらない。いわば政治のない社会であるといえる」ともべ、「そのような原始共同体的社会から政治的社会への道は、政治的社会からつぎの未来の社会への道と同じように、巨視的に一つでありながら、さまざまのゆがみがみられる」ともべている。

市川房枝の母は「女に生まれたのが、いんがなのだから……」と、自らにいいきかせて、夫のどんな横暴にも耐えたという。女に生まれたのがなぜいんがなのかを、歴史を貫く問題としてつかみ、解決のみちをさがさねばなるまい。人の歴史の出発点においては、どのように差別はなかったのか、またどのようにして差別がうまれたのか、このためにモルガンをぜひともよまねばならない。

モルガンの『古代社会』の邦訳には、

(1)高畠、村尾訳　大正一三年刊　(2)山本、佐々木訳　昭和五年刊　(3)山本三吾訳　昭和七年刊　(4)荒畑寒村訳　（改造文庫）昭和六年刊　(5)荒畑寒村訳　昭和二二年刊　(6)青山道夫訳　（岩波文庫）昭和三三年刊　がある。

青山道夫氏は訳本『古代社会』の解説のなかで　㈠山室周平『モーガン』（一九六〇年　有斐閣）　㈡布村一夫『ルイス・H・モルガン―その生誕一三一周年によせて―』（一九四九年「思想」誌一一月号）をしめしている。このほかに　㈢布村一夫編訳『モルガン「古代社会」資料』（一九七七年　共同体社刊）　㈣同『原始共同体研究』（一九八〇年　未来社）がある。

L・H・モルガン一〇〇年忌

――『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』一〇〇年のために――

布村一夫

(1)

あのあまりにも有名な主著『古代社会』の著者、わが敬愛するルイス・ヘンリー・モルガンは、一八八一年（明治一四年）一二月一七日に、満六三才になったばかりで、惜しくもこの世をさった。

一八一八年一一月二一日生まれの彼が、一八七七年の春に、『古代社会』を刊行したときには、すでに満五八才をすぎていた。したがってもはや老モルガンとよばれてもよいときであったかもしれない。それだからなおさらに、そのあと死去するまでの、一八七八年、七九年、八〇年、八一年の四年のあいだの、それこそ文字どおりに最晩年におけるモルガンは、なにをしていたかと問われてもよいが、モルガンは『古代社会』の刊行ですべてをおわったのではなくて、彼はなおもするどく前むきであったといえる。その努力は、死の直前に刊行された。『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』にぎょうけつしているといってもよいようである。もしもそうであるならば、なによりもまず、この著作の刊行を記念することではじめられねばならないし、このあまりにも知られていないさいごの著作を紹介することに終始してもよいはずであるともかんがえられる。

ちなみにモルガンの主な五つの著作はつぎのとおりである。

(1)『ホ・デ・ノ・サウ・ニすなわちイロクォイ族の連盟』一八五一年刊（原題のままの復刻本と『イロクォイ族の連盟』という題の復刻本がある）。

(2)『アメリカ・ビーバーとそのいとなみ』一八六八年刊

(3)『人類家族の血族と姻族の名称諸体系』一八七一年刊（一八七〇年刊ともされているが、確実なことはいえない）。

(4)『古代社会、野蛮から未開をへて文明にいたる人類進歩の経路にかんする研究』、ニューヨーク、一八七七年刊（同時にロンドンでも刊行された。邦訳、そしてモルガンじしんによる『古代社会』訂補については、『モルガン「古代社会」資料』共同体社刊におさめられている拙稿『「古代社会」訂補』をみよ）。

(5)『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』一八八一年刊（一九六五年に復刻本がでた）。

このほかの小さい著作や編集書、それに雑誌論文や報告などがあるが、これらについては、C・レセック『ルイス・ヘンリー・モルガン。アメリカの学者』一九六〇年刊とB・J・スターン『ルイス・ヘンリー・モルガン。社会進化主義者』一九三一年刊におさめられている著作目録をみてほしい。イ・ヴィンニコフ編『モルガン遺文集』にも著作目録がおさめられている。

モルガンの主要な民族学的著作は(2)をのぞいたのこりの四著作であるが、邦訳されているのは『古代社会』だけである。くわしいことは『原始共同体研究』未来社刊におさめた「モルガン年譜」をみていただきたい。

(2)

『古代社会』を刊行したあとのモルガンの生活はつぎのようであった。

一八七八年

(1)モルガンの四月二九日づけのJ・J・バッハオーフェンあての手紙によると、彼に『古代社会』を寄贈した（拙編訳『モルガン「古代社会」資料』二三八頁）。

(2)バッハオーフェンあての六月四日づけの手紙のなかで、「次週はコロラドへ向いますが、二、〇〇〇マイルを鉄道でいかなければなりません。それから自分の幌馬車で旅をします。わたしははるかニューメキシコのタオスまで行こうとのぞんでいますが、それがなしとげられるかどうかはたしかでありません」とかいている（同上、二五三頁）。この一八七八年夏にタオス・プエブロをおとずれたときには、彼らのあいだでは氏族組織が発見できず、時間の不足のために、彼らの出自と相続の諸基準を調査することができなかった（『……家庭生活』復刻本八四頁）。

(3)ニューメキシコからの帰途に、セントルイスでひらかれたアメリカ学術振興協会の年次大会で二つの報告をおこなった。このときの報告手稿二つがのこっている（後述をみよ）。

(4)『インディアン問題』という一八七八年一一月二二日づけの手紙が、「ネーション」誌二七号（一八七八年一一月二七日）に発表された。

(5)この年に出版された『ジョンソン新百科事典』四巻に、『アメリカ原住民の建築』（第一巻、二一七―二二九頁）と『アメリカ原住民の移動』（第三巻、四八一―四八四頁）がけいさいされた（「『アメリカ原住民の建築』についてのジョンソン百科事典のために用意された論文のなかでは、それに言及されているが、生活共産主義の原則が家屋の性格のなかにはいりこみ、それを決定したことをしめすために、主要なインディアン諸部族の家屋の平面図をわたしはしめしておいた」、とモルガンは書評的論考『モンテスーマの正餐』のなかでかいているが――『モルガン「古代社会」資料』一〇五頁をみよ――、ここであげられている論文『アメリカ原住民の建築』が、『ジョンソン新百科事典』のなかのそれのようである――『……家庭生活』序文では、「概要は、ジョンソン新百科事典の『アメリカ原住民の建築』と題する論文のなかでしめされている」とかかれている。なおレセックによると、『諸部族』もこの事典にけいさいされたとあるが、『モルガン遺文集』のなかの著作目録ではしめ

されていない)。

一八七九年

(1)三月一三日づけのモルガンのバッハオーフェンへの手紙を、夫人メアリが代筆している。

(2)五月に、ファイスン、ハウィット共著『カミラロイ部族とクルナイ部族』一八八〇年刊への序文をかく(『モルガン「古代社会」資料』二〇一頁以下にこの序文が邦訳されている)。

(3)アメリカ学術振興協会の総裁にえらばれた。

一八八〇年

(1)『アメリカ考古学協会第一次年報』にかいた『わが国のインディアン諸部族の家屋と家庭生活、ニューメキシコ、アリゾナの遺跡、サンウォン遺跡、ユカタンと中央アメリカの遺跡の調査のための企図』をおくるむねを、六月二一日づけのバッハオーフェンへの手紙のなかでかいている。だが一一月一二日づけのバッハオーフェンへの手紙では、バッハオーフェンの『古代書簡』第一巻一八八〇年刊をうけとり、そして『アメリカ考古学協会第一次年報』をおくることをしらせている(これは『アメリカ考古学研究所第一次年報』にかいた『アメリカ原住民の家屋の研究。付・ニューメキシコその他における諸遺跡の発掘の企図』のことらしい)。

(2)『アメリカ考古学・民族学ピーボディ博物館第一二次年報Ⅱ』に、『ニューメキシコのアニマス河畔の石造プェブロの諸遺跡について』を発表する(これは一八七八年の調査報告の一部分らしい)。

一八八一年

(1)一月二七日づけのバッハオーフェンあての手紙を、メアリ夫人が代筆している(これがバッハオーフェンあてのモルガンのさいごの手紙である)。

(2)この一八八一年、とくにさいごの数か月は、家にとじこもった。一〇月にロチェスターにやってきたA・F・バンデリアさえも面会がゆるされなかった(モルガン夫人メアリは一〇月一七日づけのF・W・プトナムへの手紙のなかで、バンデリアが先週の火曜日にロチェスターにきたが、それをモルガンにしらせることさえあえてしなかったとかいている。バンデリアのモルガンあてのさいごの手紙は一八八一年六月二七日づけである(第一五八番)。それは『アメリカ人類学における先駆者たち――バンデリアのモルガンへの諸手紙、一八七三―一八八三年』二巻、一九四〇年刊におさめられている。L・A・ホワイトによる編集であり、第一―一五八番までがモルガンあて、第一五九―一六三番の五通が一八八三年に死去したモルガン夫人メアリあてである)。

(3)モルガンの死の直前に、『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』(合州国地質調査局、北アメリカ民族学紀要第四巻)が刊行された。

(4)一二月一七日にモルガンは死去した。このさいごの一年は、いわゆる「神経疲労」でくるしめられた(L・A・ホワイト編『古代社会』序文、前づけ一八頁)。

一八八二年

一八八一年八月にシンシナティで年次大会をおこなった『アメリカ学術振興協会への手紙』が、その「第三〇回大会紀要」に発表された。

このほかに、未公刊手稿の目録が、『モルガン遺文集』二三三―

二三八頁におさめられているが、これによると九五篇の手稿がのこされている。一八七七年と一八八一年にかかれた手稿はないし、また第八八―九五篇の手稿には日づけがない。したがって一八七八年、七九年、八〇年にかかれた手稿はつぎのとおりである。上の番号は手稿の通し番号である。

(82)『人類進歩の古典的仮説』、一八七八年二月五日のパンディット・クラブでの報告手稿。

(83)『ニューメキシコのアニマス河畔の石造プエブロの諸遺跡についての所見。平面図つき』

(84)『インディアン生活の重要な古代村落遺跡としてのサンウォン河地方についての考察』

この二篇は一八七八年八月のセントルイスでのアメリカ学術振興協会第二七回大会での報告の手稿である。

(85)『ニューメキシコにおけるプエブロ家屋』、一八七九年三月二五日のパンディット・クラブでの報告の手稿。

(86)『ハムフレィ判事とエリイ博士についての追憶』、一八七九年一一月四日のパンディット・クラブでの報告の手稿。

(87)『インディアン諸部族の家屋の研究。考古学研究所の主催での、ニューメキシコ、アリゾナ、サンウォン地方、メキシコ、中央アメリカにおける諸遺跡の探求のための助言』、一八八〇年五月一一日のパンディット・クラブでの報告の手稿。

パンディット・クラブは一八五四年七月にロチェスターでつくられた文学・学術的なクラブである。ちなみにこの「未公刊手稿目録」は、C・レセック『ルイス・ヘンリー・モルガン。アメリカの学者』一九六〇年刊にはおさめられていない。以上は、わたしがつくった「モルガン年譜」（拙著『原始共同体研究』）一四八―一五七頁）を補うものである。

(3)

C・レセックはかいている。

「遠い過去の美事な遺物がある、この未開で、ほとんど踏査されていない地が、六〇才の学者に新しい生命をもえたたせた」（『ルイス・ヘンリー・モルガン。アメリカの学者』一四七頁）。

このあとつづけて、「『古代社会』の増補は、彼の心像をかきたてた」、とレセックはかいている。

まさにそのとおりにちがいない。これにたいしてすこしばかりの解説をつけくわえておきたい。

モルガンは『古代社会』を一八七七年春に刊行したが、そのときにはその第五篇「家屋建築の観念の発達」をとりのぞいた（このことをモルガンは『……家庭生活』序文でかいている。拙編訳『モルガン「古代社会」資料』一四六―一四七頁をみよ）。ニューヨークの、出版業をはじめたばかりのヘンリー・ホルトによって出版された『古代社会』は、四六版、前づけ一六頁、本文五六〇頁であった。それで、とりのぞかれた第五篇をくわえると、この本が厖大すぎるということであったのであろうが、モルガンがこの出版のために八五〇ドルを前貸ししたことをみのがしたくない。この出版者は『古代社会』の出版をモルガンにすすめたとはいえ、資金難のためにモルガンから借りいれたのであれば、このためにも『古代社会』の第五篇をとりのぞかざるをえなかったのかもしれない。

ちなみにモルガンは、一八八〇年三月四日づけのファイスンあて

の手紙のなかで、『古代社会』一、〇〇〇部がうれたこと（ホルト社から第二刷が一八七八年にでており、しかも一九〇七年に第三刷がつくられているので、『古代社会』は第一刷と第二刷それにロンドンのマックミラン版をあわせて一、〇〇〇部以上が印刷されたとみられる）、前貸しした金がもどっていないとしらせている。

とにかく、とりのぞかれた第五篇を、「その当時、これを別に出版する意向をもたなかったが、その大部分は独立の諸論文として印刷された」、と『……家庭生活』序文でかいているが、やはりモルガンは、これを印刷したいと念願したのである。レセックのいう『古代社会』の増補は、彼の心像をかきたてた」のなかの「『古代社会』の増補」は、とりのぞかれた第五篇の出版――すなわち『……家庭生活』の刊行となって実現するもの――であるとみてよいようである。

それというのも、一八七八年の南部への調査旅行は、とりのぞかれた第五篇を増補する資料をえるためのものでさえあったとかんがえられもするからである。しかもそのうえに、この調査旅行は、モルガンがかつて発表したメキシコのアステカ族連合体についての見解を、あらためて確認するためのものでさえあるようである。

モルガンの一八七八年の調査旅行と第五篇の出版、これらがかさなりあって、六〇才のモルガンをふるいたたせているのである。

とりあえずはまず、モルガンのこのさいどの著作のもくじをしめしておきたい。これは一一章からなるが、菊判、前づけ一一頁、本文二八一頁のものである（復刻本は、菊判、前づけ三一頁、本文三一〇頁、索引九頁である）。

『アメリカ原住民の家屋と家庭生活』もくじ

第一章　社会的、統治的組織
第二章　外者歓待の法則とその一般的実施
第三章　生活における共産主義
第四章　土地と食物についての風俗、習慣
第五章　ニューメキシコの北方のインディアン諸部族の家屋
第六章　ニューメキシコの定住インディアンの家屋
第七章　サンウォン河とその諸支流の定住インディアンの家屋の遺跡
第八章　同上（つづき）
第九章　マウンド・ビルダー族の家屋
第一〇章　アステカ族すなわち古代メキシコ人の家屋
第一一章　ユカタン半島、中央アメリカの定住インディアンの家屋の遺跡

一九六五年にこの本が復刻されたが、そのポール・ボハンナンの編序文によると、第一章とつぎの三章には、モルガンの諸命題がコンデンスされているとされる――まさにそのとおりで、『古代社会』をよむ感がもたれる。そしてまたマウンド・ビルダー族のマウンドをモルガンは家屋とみたが、埋葬塚であると訂正されている。重大なことは、第一〇章は、モルガンの一八七六年の「ノース・アメリカン・レヴュー」誌にかいた論考『モンテスーマの正餐』のリプリントであって、これはこの本のウィーク・ポイントであるとされていることである。ボハンナンは十分によんでおらず、あまり好意的でないようにみうけられる。

たしかに、(1)『……家庭生活』の復刻本二五二頁からはじまる第

一〇章は、二五八頁にいたるまでは『……正餐』の「序論」部分そのままである（『モルガン「古代社会」資料』におさめられている拙訳『モンテスーマの正餐』七五―八五頁）。(2)『……家庭生活』では、このあと、『……正餐』のなかの「七、食事の順列」の第一項「宮殿」におけるエレラ『メキシコ史』第一巻三六一頁からの引用へとつづいている（拙訳、一〇九頁）。

また『……正餐』の「四、原始共産主義――生活における共産主義の実行」の「同時代の実例」の項での記述は、『……家庭生活』復刻本第三章、七五―七六頁におさめられている。しかも『……の正餐』のなかでの「ウシュマール遺跡の東のわずかにはなれた Nohacacab には」は、「ウシュマールの東の数マイルのところの Nohcacab には」と訂正されている。また「ヨーロッパ人の発見時代」は「スペイン征服者の時代」とあらためられている。ようするに、『……正餐』が『……家庭生活』の第一〇章にそのままリプリントされているのではないのである。

モルガンが『……正餐』によって書評したバンクロフトの著作『太平洋岸諸州の土着諸人種』第二巻では、バンクロフトは古代メキシコの帝国または王国という見解をとっているが、モルガンはこれに反対する。白人によって征服されるまえの古代メキシコ社会はアステカ族連合体であって、それは未開中期にあるとした。このモルガン見解にたいしても、その当時にも、すでに大きい反対があったが、モルガンは自説をまもるために、A・F・バンデリアの助けをもとめている。『……家庭生活』では、バンデリアの論文『古代メキシコ族の社会組織と統治様式について』（『考古学・民族学ピーボディ博物館第一二次年報』一八八〇年刊）をも引用し、古代メキシコ族の生活基準であった「大きい世帯のなかでの生活共産主義」（復刻本二六二頁）を、『……家庭生活』のなかで、かさねて主張しているのである。

『……家庭生活』第五章以下が、この本の本論、すなわち『古代社会』からとりのぞかれた第五篇にあたるようであるが、第五章ではつぎのようにかかれている。

「前述したように、共通の法則は、イロクォイ族の『長屋』から、ニューメキシコの『プエブロ家屋』、パレンケのいわゆる『宮殿』、ウシュマルの『尼僧の家』にいたるまで、このすべての建築に一貫している。これは最初は世帯諸群に限られ、さいごには村落や宿営地のすべての住民たちにまで歓待の法則によってひろげられた生活共産主義への適用の法則である。飢えと窮乏はインディアン村落のどこでも知られておらず、豊かさはひろくゆきわたっていた。イロクォイ族にみられるように一つの大世帯によって、またはユカタンにおけるようにいくつかの世帯群によって、占居されている共同長屋は、彼らの風俗習慣の自然的な、さけがたい結果であった。生活共産主義と歓待の法則は、野蛮と未開にあるインディアン生活のあらゆる局面に、おそらく随伴したらしい。彼らの社会状態についてのあれこれの諸事実は、彼らの建築のなかに表われ、その説明に寄与するであろう」（『……家庭生活』復刻本一〇五頁）。

このように、生活共産主義と歓待の法則がよみとられる家屋建築にもとづいても、インディアンが文明に、したがって政治的社会である階級社会にあったのではないとされるが、このようにみるモルガンは、メキシコにあったのは諸部族の連合体であったと認定するのである。

このようなモルガンのメキシコ社会観は、H・クーノーによっても、またG・P・マードックによっても支持されたが、戦後になってからのモルガン反対は、科学アカデミー版『世界史』のなかでよまれる。くわしくは拙稿『マルクスの原始人』(『原始共同体研究』三三三―三三四頁)をみてほしい。また拙稿『民族学と歴史学と』(「歴史学研究」誌、一九七八年十一月、三七頁)でもかんたんにふれておいた。

(4)

わたしはすでに論文『母権の復権のために――モルガン『古代社会』一〇〇年記念――』のなかで、『……家庭生活』の四か所、すなわち(1)復刻本六六頁(2)一二七頁(3)一二八頁(4)一二八頁で、モルガンがバッハオーフェン『母権論』に言及していることをしめした(この論文は拙著『原始共同体研究』におさめられている)。

それにしても、これまでに『……家庭生活』についてはほとんど関心がはらわれていないようであるが、つとに早く『モルガン遺文集』のなかでなされた一つの校訂を指摘しておかねばならない。

『……家庭生活』の復刻本の七〇頁の脚注(1)のなかで、モルガンは「オーストラリアのバリスダールの地理学協会員であるアルフレッド・W・ハウィットは、著者への一つの手紙のなかで、家族集団のなかでの食物の分配にかんするオーストラリア部族の、つぎのような独自の慣習に言及している」として、ハウィットの記述を引用している。この手紙は『モルガン遺文集』におさめられている一八七七年七月二七日づけのモルガンへの手紙である。もちろん『古代社会』刊行のあとにモルガンがうけとった手紙である(ちなみに『古代社会』ではハウィットの名があらわれていない)。共著『カミラロイ部族とクルナイ部族』一八八〇年刊の著者の一人であるハウィットのこの手紙をうけとったモルガンは、『……家庭生活』のなかで引用し、そのなかで wife's mother とかいている。じつはこれは wife's brother のまちがいである、と『モルガン遺文集』の編集者ヴィンニコフが校訂する。まったくめずらしい、ほとんど気づかない校訂であるが、この手紙は狩猟獲物の分配の慣習をのべたものであり、ここにも生活共産主義がよみとられるとしている。

なお、さきにふれたバンデリアのモルガンへの諸手紙がほとんど知られていないように、『モルガン遺文集』におさめられた二一人からモルガンあての三四通の手紙もまた未知のままである。ハウィットからの手紙は、ここでしめした一通だけがおさめられており、ファイスンの手紙が四通よまれる。ほかにチャールズ・ダーウィンの手紙三通、H・メーンの手紙四通などが注意にあたいする。

ついでながらB・J・スターンが編集した『ロリマー・ファイスンおよびA・W・ハウィットのルイス・ヘンリー・モルガンへの諸手紙・抄』は、一九三〇年の「アメリカン・アンスロポロジスト」誌第三二巻二五七―二七九頁、四一九―四五三頁に発表されたが、ハウィットからのもの一〇通、ファイスンからのもの三四通がおさめられている。さきのハウィットからの手紙もここにおさめられていることを付記しておく。これらの手紙を研究することはざんねんながら未来にのこされている。

ところで、わたしのしるかぎりでは、モルガンのこの『……家庭生活』を、もっともよくよんでいるのは、H・クーノーであるとしたい。クーノーについては拙稿『民族学と歴史学と』のなかでかん

たんにふれてはいるが、彼が一九二六年―三一年に刊行した『一般経済史』は、この国では二つの邦訳をもっている。

(1) 高山洋吉訳『経済全史』東学社、八冊、一九三七年刊（a訳本）。

(2) 藤沢保太郎訳『世界経済史大系』育生社弘道閣、四冊、一九四一年刊（b訳本）。

かんたんな照合によると、b訳本はa訳本を、ほんのすこしばかり改訳したもののようであり、あるいは訳者は同一人物ではないかとうたがわれる。

ちなみに井上五郎氏のご教示によると、「民俗学」誌第四巻一号（一九三二年一月）に、この本の第一巻第一章が「タスマニア人及びオーストラリア人の拾集経済と狩猟経済」として、「宿営地に於ける生活」項までが、平野栄治氏によって訳されている。この訳業がどこまで連載訳出されたかはたしかめられていない。

とにかくこれらの邦訳によって、クーノーによる『……家庭生活』からの引用をみるかぎりでは、クーノーの大きい努力をみとめねばならないのであるが、彼はモルガンを十分に理解していないこともあきらかである。

クーノーは『……家庭生活』復刻本六四頁からつぎのように引用している。

〔A〕「或る一人の家族員が狩猟または魚撈の遠征で獲得し若しくは土地耕作によって獲得した物は共同貯蔵所へ入れられた。家の中では彼等は共同の貯蔵物を食って生きてゐた。*即ち各世帯は一人の家族経済を監督する老婦人の下に立ってゐる。簡単な日常の食事が諸々のカマドで調理されると、彼女が呼んで来られ、今や食物を釜から出して要求に応じて各個の家族に分配するのが彼女の仕事になった。残ったものは老婦人によってその返還が要求されるまでは、他の人によって保管させられた。イロクォイ人は略々一七〇〇年の頃までそうした家族共同体に生活してゐた。稀にはその後なほ殆ど百年もそうした生活をしてゐたものもあった。」（a訳本二一〇頁、b訳本二二三―二二四頁）。

この引用文のまえにクーノーは、「セネカ部族に養取された、イロクォイ族の生活様式の正確な研究者となったルイス・ヘンリー・モルガンはこの家共同体に関して報告している（「アメリカ土人の家屋と屋内生活」、六四頁）」とかいている。

イロクォイ族をつくっていた六部族のうちのセネカ部族に養取されたのであるが、このようなモルガンのさいごの著作『……家庭生活』からの、クーノーじしんによるドイツ語訳による引用を、邦訳したのが〔A〕であるので、ドイツ語訳との照合も必要であるし、イギリス語原文ともくらべねばならない。〔A〕のはじめの「或る一人の家族員」は、クーノー原文では ein Haushaltsmitglied「一人の世帯員」であり、モルガンがかいた「世帯の一人の成員」が正しくドイツ語訳されている――したがって邦訳が正しくない。また邦訳されている「家族共同体」は、クーノー原文での Hausgemeinschaft「家共同体」であり、モルガンの「世帯（ハウスホールド）」にあたる（Heinrich Cunow, Allgemeine Wirtschaftsgeschichte, Bd.1, Berlin 1926, S. 193）。ちなみに「家共同体」は「家族共同体」とおなじものとみてよい。

そしてわたしがつけた*印のあとによまれる「各家屋にはいくつかの炉があり、ふつう四部屋に一炉であり、それは通路の中央にお

かれていて、煙突はなかった。」は、邦訳では省略されているが、クーノー原文では省略されていない。ちなみにクーノーは『……家庭生活』六四頁をしめしているが、引用文〔A〕は復刻本六四―六五頁によまれる。

そしてまた、この引用文〔A〕のあとひきつづいて、つぎの文章がかかれているのを、クーノーは省略している。

「セネカ部族のある老婦人[1]が筆者に、まだ彼女が娘であった三〇年まえに、これらの合同長屋 joint tenement houses（彼らによって長屋 long-houses とよばれた）の一つに生活していたが、それは八家族と二つの炉があった。その当時彼女の母と祖母が、これらの大きい世帯の一つのマトロンとして行動した。この古代のイロクォイ族の生活の型の面影はいまでは消えさり、その記憶もほとんどきえているが、ひどく参考になる。」

この引用文のなかの原注（1）は、「トナワンダ保留地の故ウィリアム・パーカー夫人である」である。彼女はイーリ・パーカー（『イロクォイ族の連盟』を著作したおりのモルガンの協力者）の母である。モルガンが彼女からききとったのは何時のことかはあきらかでないが、モルガンが最初にセネカ部族をおとずれたのは一八四五年であるので、かりにそのとき彼女からきいたのであれば、彼女たちの長屋生活は一九世紀になるかならないかのことになるらしい。そうであればこの保留地では長屋がなおも残存していたのかもしれないが、モルガンが調査したころには、もはや母系出自が父系出自にかわって、一夫一妻婚家族として彼らは生活していたようである。

〔B〕 ちなみにクーノーは、「後になって伝道者や白人の移民の影響を受けて長屋制度が止み、イロクォイ人の一部が遠くのインディアン保留地に収容されたとき、……」（a訳本二一四頁、b訳本二二八頁）とかいているが、その明確な時期をしめしていない。

また『……家庭生活』の「一二〇頁に於て吾々に一筒の設計図を残したセネカ人の家屋は間口九十六呎奥行十七呎であった。個々の家族のために部屋が二十四箇もあった。両方の狭い側面の各々に入口があってそれが六箇の竈を有つ広い、家の間口と同じ長さを有つ廊下に通じてゐた。廊下の左右に約六呎乃至八呎の幅の板壁、樹葉、莚壁で互に区劃された各個の家族の部屋があった」（a訳本二〇八頁、b訳本二二一―二二二頁）とかいている。

これは『……家庭生活』第五章によまれるものにしたがって、クーノーがかいたのである。「一二〇頁」は、復刻本の「一二六頁」にあたる。この第五章での長屋、村落についてのモルガンの記述は、イロクォイ族の歴史のためにも貴重であり、メーンによるヒンドゥ族の合同未分割家族（家族共同体をさす）についてもふれられているが、一九世紀がはじまるまえにイロクォイ族の長屋はきえたとかかれている（一二八頁）。

したがってまたクーノーはかいている。「トーテム団体〔氏族〕は一種の地区＝若しくは村落共同体というようなものを形成してゐなかった。種族〔部族〕はその特別の地域を有ってゐたが、同胞団体 Brüderschaft〔胞族〕やトーテム共同体〔氏族〕はそれを有せず、またトーテム団体も同様に村落定住地の中でその特別の同族区と云うようなものを有っていなかった。村落では寧ろその属するトーテムの如何を問わず仲間同志多彩的に雑居していた。何となれば血統〔出自〕は女系が通用し、従って子供は常に母のトーテム団体

に属していたが、男子は決して彼の母の団体（氏族）若しくは、同じことであるが彼自身の団体に於て結婚することは出来なかったので男子は常に彼の妻や子供とは別のトーテム団体に属してゐたからである。それは誰もその故郷の村を立去り、その種族の他の村に定住したりまたは他のトーテム団体は養子に行くことを妨げなかったからである。」（a訳本二〇七頁、b訳本二二〇―二二一頁。〔　〕は引用者による）。

これはイロクォイ族が長屋にすみ、連合体をつくって生活していた未開上期（アヴェルキエヴァによる訂正であるが、モルガンは未開下期とした）のころのことである、すなわちアメリカ革命のまえのこととしてよい。どうもクーノーの記述には歴史的な規点がかけている。

(5)

イロクォイ族連合体については、クーノーはつぎのようにかいている。

〔C〕「イロクォイ人が初めて伝道者を知った頃は、彼等の『民族』は五箇の団結した近親の種族〔部族〕、モハウク人（Mohak）、カユガ人、オネイダ人、オノンダガ人及びセネカ人から或ってゐた。……後にはもう一つの種族、ツスカロラ人が同盟に加はったが、その代り一七七六年に既にモハウク人の大部分がカナダへ移動してしまったので、同盟は再び五種族のみから成るようになった。」（a訳本二〇四頁、b訳本二一七―二一八頁）。

このあとすぐにクーノーはつづけている。

「これらの種族の政治的に同類の組織に関しては吾々はアメリカの人類学者ヘンリー・ルウイス・モルガンによってよく教えられてゐる。特に彼の両著『ホ・デ・ノナウネー、――イロクォイ人の同盟』（ロチェスター、一八五一年）及び『古代社会』（ロンドン及びニューヨーク、一八七七年）が問題になる。後者は "Urgesellschaft"（「原始社会」）という表題でよいドイツ訳も出てゐる。」（a訳本二〇五頁、b訳本二一八頁）。

戦前の邦訳なので、まちがいもあるのはやむをえないが、a訳本での『ホ・デ・ノナウネー、――イロクォイ人の同盟』は、b訳本では『長い家の人達（Ho-dé-no-sau-nee）或はイロクォイ人の同盟』と正しくあらためられている。「同盟」は League の訳であるが、この本を『ホ・デ・サウ・ニすなわちイロクォイ族の連盟』と訳しておきたい。「連盟」とか「同盟」とかいわれるものは、『古代社会』では「連合体」Confederacy と名づけられている。

ところで「イロクォイ族の連盟」すなわち「イロクォイ族連合体」は、モーホーク部族、オナイダ部族、オノンドーガ部族、カユーガ部族、セネカ部族の五部族によってつくられた。この形成の年代については諸説があるが、タスカローラ部族が連合体の第六番目の部族としてみとめられたのは一七二二年である。

これにかんしてクーノーは、一七七六年にモーホーク部族の大部分がカナダに移動したとかいているが、これはアメリカ革命すなわちアメリカの独立戦争のさいに、モーホーク部族がイギリスがわについたので、イギリス軍の敗北の結果として、モーホーク部族がイギリス領カナダへ逃亡せざるをえなかったことをさしているのである。したがってこの独立戦争のためにイロクォイ族連合体はこわれてしまったのである。これについてモルガンは「一七七五年ごろカ

ナダに移動したモーホーク部族」と『古代社会』でかいている（青山道夫訳『古代社会』上巻、一八五頁）。そして「アメリカ革命の当初において、イロクォイ族は会議における満場一致を欠いたために、われわれの連邦（アメリカ合州国）に対する宣戦に同意することができなかった。多数のオナイダ部族の酋長が提案に反対し、そして最後に彼らの同意を拒否した。モーホーク部族では中立が不可能であり、そしてヒネカ部族は戦争を決意したので、各部族がそれじしんの責任で戦争に従事することもあるいはまた中立にとどまることも可能な旨が決定された。」（青山訳『古代社会』、上巻、二一一頁）とかいている。

こうしてイロクォイ族連合体は、その六部族のそれぞれの判断で、あるいはアメリカがわに、あるいはイギリスがわについた。それで、この戦争がおわったとき、とくにそのあとの一七七九年のジョン・サリバン将軍の遠征によって、モーホーク部族とカユーガ部族が、セント・ローレンス河の向うがわのイギリス領カナダのグランド河流域へ逃亡したのである。したがってクーノーが、モーホーク部族の大部分がカナダへ移動して、連合体は再び五部族からのみ成るとかいているのは、正しくない。独立戦争がはじまったとき、とくにそれがおわったときには、イロクォイ族連合体はその機能をうしない、崩解してしまったのである。

これをモルガンは『古代社会』のなかで、「古代の連合体の面影のみが現在では残っているにすぎないけれども」とかき、「一七七五年ごろカナダに移動したモーホーク部族を除いて、連合体は酋長および補助者を補足して完全に構成されていた」（青山訳、上巻、一八五頁）のである。これは、モルガンが一八四五年にニューヨーク州のイロクォイ族のトナワンダ保留地をおとずれ、そこでひらかれた「六民族の会議」すなわち六部族よりなりたっていたイロクォイ族連合体の総会をみたのは、まさに「連合体の面影」であったのであり、独立をうしなってアメリカ合州国の主権のもとに保留地にとじこめられたところでひらかれた連合体の総会は、かつての独立時代に機能していた連合体総会のありかたの模倣であり、残存であり、昔の面影であったのである。この面影から、モルガンは連合体が過去に活動していたときの組織、機能を復元することができた。このようにイロクォイ族連合体総会の残存している面影をみて、かつてのイロクォイ族連合体を記述できたのは、まさにモルガンにとって幸福であり、モルガンからあとのどの民族学者もこのような機会をもつことができなかった。ただ、未開上期にあった諸部族の連合体、したがってまた部族、胞族、氏族のありかたを復元できたとしても、白人によってこわされてしまったこれらの社会組織が、もしも破壊されずに、みずからに発展をつづけたとしたら、連合体がどのようにして未開からぬけだすかを知りたいのであるが、イロクォイ族連合体については知ることはできるはずはなかったことを指摘しておきたい。未開上期にある原始社会がみずからの力によって政治的社会へとすすみでる経路は、歴史学においても、民族学においても、記録されていないのである。

クーノーが移動したモーホーク部族とかいたことにかんれんして、クーノーはイロクォイ族連合体を歴史的につかんでいないことがあきらかになったが、カナダのグランド河畔へ逃亡したモーホーク部族とオナイダ部族とは、二つ山イロクォイ族とよばれている。これはF・E・サーヴィスの『原始社会組織』によると、「モント

リオール周辺の亡命部族である二つ山イロクォイ族（園耕・狩猟・漁撈民）」である（Primitive Social Organization, Random House. second printing, 1964. p. 118. second edition, 1971 では p. 109. 邦訳『未開の社会組織』一〇二頁）。サーヴィスはこの二つ山イロクォイ族を「無定形の、つまり混成的な諸部族」those (tribes) that are amorphous, that is, composite にいれ、もともとのイロクォイ族を「単系出自諸集団をもつ諸部族」Tribes which lineal descent groups にいれている。これはサーヴィスの分類による「部族」レベルでの諸部族の「極端に一般化した対称的な社会構造の諸タイプ」にわけてのことであるが、連合体をつくっていたときの六部族からなるイロクォイ族は半園芸・半狩猟とされている。二つ山イロクォイ族はイロクォイ族の分枝であるが、もはやイロクォイ族連合体がこわれたあとでの分枝である。したがってみずからの独立をもっているときの母系出自をもっているイロクォイ族の諸部族と、イロクォイ族連合体がこわれてしまったあとの逃亡者としての二つ山イロクォイ族をくらべることは、もはや正しい比較ではありえない。

リヴァースは一九〇七年にかいたタイラー生誕七五年記念論文『類別制親族名称体系の起原について』のなかで、二つ山イロクォイ族を、モーホーク部族とオナイダ部族という本体 main body からの植民者たち colonists で、モントリオールの上流にすみついたとし、これを「孤立したバンド」an isolated band とよんでいる（W. H. R. Rivers, Social Organization. p. 182.「女性史研究」誌、第八集、五八頁）。リヴァースがこのようによんでいるのは、モルガン『人類家族の血族と姻族の名称諸体系』一五二頁での記述にしたがってのことである。この本の一六五頁では、モルガンはまたこれを fragment of Iroquois stock ともかいている。

モルガンは、一八六〇年一月にトナワンダ保留地で、西カナダのグランド河からやってきたモーホーク部族インディアンからモーホーク部族の親族名称をききとった。また(1)一八六〇年五月にはニューヨーク州オナイダ・センターで、オナイダ・インディアンであるJ・クリスティアンから、また(2)オールバニ市において一八六一年二月に、セント・レギス保留地に住んでいるインディアン（オナイダ部族とモーホーク部族の混血）から、それぞれにオナイダ部族の親族名称を採集した。さらに一八六一年一月に二つ山イロクォイ族の二人のインディアンから彼らの親族名称をききとっている。モルガンはそれらを『……名称諸体系』のなかに記録したが、これにもとづいてリヴァースは彼らの親族名称体系の分析をすすめたのである。

「二つ山イロクォイ族とよばれるイロクォイ族の孤立したバンドは、……父の姉妹と母の姉妹とのあいだの区別は存在しなかったし、父の兄弟の子ども、父の姉妹の子ども、母の兄弟の子ども、母の姉妹の子どものあいだでは何の区別もされなかった。こうしてわれわれは……むしろハワイ式名称体系にちかいところの名称体系をこのイロクォイ部族のばあいにもっている。」（Social Organization. p. 182.）

これはリヴァースみずからが調査したトレス海峡の西部諸島と東部諸島とでの親族名称法のちがいについての研究につながっている。西部のマブイアグ島では「父の兄弟の息子」と「母の兄弟の息子」との区別はないが、東部のマレイ島ではこの区別がある。この

ような東と西との対比のなかに、リヴァースは親族名称法の「単純化の方向にある変化の諸段階をみいだす」のである（Social Organization. p. 179.「女性史研究」誌、第五集、八六頁）。

くわしい説明をはぶくが、リヴァースは結論的にかいている。

「二つ山イロクォイ族は、モーホーク部族とオナイダ部族からの移住者たちで、モントリオール市の上流に居住していた。そしてもしも彼らの名称体系が原始的としてみとめられるならば、遠くない時代に本体からあきらかに分離したこの小さいバンドは、原始的な型〔マライ式をさす〕を保存しており、他方では本体は類別制名称体系〔トゥラン・ガノワン式をさす〕の普通の特徴をしめしたということを推測しなければならない」（Social Orgarization. p. 182.「女性史研究」誌、第八集、五八頁）。

モルガンによって採集記録された二つ山イロクォイ族の名称体系が「正確であると期待する」とリヴァースはかいているが、「モルガンはこの特殊な名称体系をほとんど留意することなく見すごしたのはおどろきである。もっと注意すれば、マライ型は類別制名称体系の進化での初期段階をあらわすという彼の意見の修正を彼にさせたかもしれない」（Social Orgarization. p. 182.「女性史研究」誌、第八集、五八頁）と結論する。

たしかにモルガンは、二つ山イロクォイ族の名称体系は、本質的にはオナイダ部族、モーホーク部族のそれと一致しているとみているのであり、リヴァースのいうように、くわしい検討をしなかった。好意的に、結果論的にいえば、モルガンにあっては、マライ式とトゥラン・ガノワン式とを区別し、それらを序列するための努力が先行し、二つ山イロクォイ族での歪曲にまで検討がいたらなかっ

人別		a	b		c
		セネカ部族	オナイダ部族	モーホーク部族	2つ山イロクォイ族
父の兄弟		父	父	父	父
母の兄弟		おじ	おじ	おじ	おじ
父の姉妹		(A) おば	(Y) 母	母	母
母の姉妹		母	母	母	母
男称 父の兄弟の息子	長	(B) 兄弟	兄弟	兄弟	兄弟
	少	いとこ	いとこ	いとこ	(Z) 兄弟
父の姉妹の息子	長	いとこ	いとこ	いとこ	兄弟
	少				
母の兄弟の息子	長	いとこ	いとこ	いとこ	
	少	いとこ	いとこ	いとこ	
母の姉妹の息子	長	兄弟	兄弟	兄弟	兄弟
	少				

たとすべきかもしれない。

リヴァースのように、トレス海峡での調査があり、フィジィ島やトンガ島での親族名称についての知識があったればこそ、二つ山イロクォイ族にまで研究がおよぶことができたのであるといえるが、ともかくリヴァースの地道な基本的な研究は、たしかにモルガンの功績をみとめたうえで、モルガンのマライ式→トゥラン・ガノワン式という類別制親族名称体系の発展図式を修正して、トゥラン・ガノワン式→マライ式とする。より正確にはトゥラン・ガノワン式だけを「類別制親族名称体系」とし、マライ式を単純化的な変異とみるというすぐれた業績をあげることができたのである。

それにしてもリヴァースは二つ山イロクォイ族の親族名称をより具体的にしめしていないが、モルガン『……名称諸体系』から、まえの表にみられるように親族名称をぬきだして、リヴァースの論述の要点にしめしておきたい。

この表にしめされる(A)と(B)はトゥラン・ガノワン式にみられる名称であり、(Y)と(Z)はマライ式にみられる名称のつかいかたである。したがってセネカ部族は(A)と(B)のトゥラン・ガノワン式を、二つ山イロクォイ族は(Y)と(Z)のマライ式をもっているが、オナイダ部族とモーホーク部族は(Y)と(B)であって、混成的である。こうして(a)セネカ部族(b)オナイダ部族・モーホーク部族(c)二つ山イロクォイ族の対比において、(c)のものを(a)の単純化とせざるをえないのである。

(6)

クーノーによるイロクォイ族連合体についての記述にふれながら、二つ山イロクォイ族をめぐってのリヴァースのすばらしい考究――マライ式についてのモルガン見解を批判し訂正する――にそれたきらいがあるが、これによってクーノーがリヴァースほどにモルガンをよまなかったことがあきらかである。さらにまたサーヴィスもイロクォイ族にかんしてはリヴァースほどによんでいないこともしめされた。

クーノーをめぐってさらにさきにすすみたい。クーノーは『……家庭生活』八〇頁から引用する。この重訳である邦訳個所を、もとのイギリス語文（復刻本でも八〇頁である）と照合してしめすことにする。

〔D〕「この保留地の一部分は、すでに久しい以前に、かこわれて、その所有者によって耕作される小さい農場のかたちで個人に分配された。のこりの部分は分配されずに、首長（チーフ）たちの監督のもとにおかれた。人びとはこの留保部分の森林地から乾木や乾草をとることがゆるされたが、立木に手をつけることはゆるされなかった。若者が結婚して、もし土地をもたないと、首長たちは彼に、生活のために耕作する四〇エーカーをあたえたが、彼にそれにたいする所有権があたえられるまえに、薪とするために立木をきることが、部族のすべてのものに、割当地が開放される。こうして人びとが薪の需要をみたし、新しい家族の耕作のために開墾するという二重の目的がたっせられる。この所有権は相続によって承認された相続人にうつる。ある者はその財産を他のなに人かに移譲するか賃貸しすることができる。彼は白人に賃貸しすることができるが、白人に売却することが決してできない」（a訳本二一四頁、b訳本二二四―二二五頁）。

この引用文〔D〕のまえに、「たとえばルイス・ヘンリー・モルガン

は、ナイアガラ河畔――そこではこの部族は政府から立派な耕地を約八千エーカーを指定してもらった――のタスカローラ保留地にかんしてつぎのごとく報告している」、とクーノーはかいているが、これは『……家庭生活』のなかで、「このイロクォイ部族が、およそ八千エーカーの立派な耕地を一体として共有しているナイアガラ河畔のタスカローラ保留地では同じ風習がおこなわれている」とかかれているのによる。

またクーノーは〔D〕の引用文のあとに、「おなじことをモルガンはセネカ部族のトナワンダ保留地についても報告している」とかいているが、クーノーはこの個所を引用していない。この引用されていない個所であるつぎの〔E〕は、『……家庭生活』の第四章の冒頭からかきはじめられているものであって、引用文〔D〕のまえまでつづいているのである。したがってクーノーは〔E〕引用文を引用すべきであったのである。そうしなかったクーノーは、保留地でのインディアンの生活を、かつてのイロクォイ族連合体をつくっていた時代の生活のたんなるつづきとみていたのではないかとうたがわせる。もちろんクーノーは、「旧い時代に於いてはイロクォイ族のあいだには個人的な土地財産というものはなかったので、土地も個人的に相続されえなかった」とかいてはいるが、一八世紀までの独立自治の部族による土地所有と、独立をうしなったあとの保留地での土地所有との根本的なちがいをあきらかにしていないのである。

さてクーノーが引用していない『……家庭生活』のなかの〔E〕引用文はつぎのとおりである。

〔E〕「イロクォイ族のあいだでは、部族の領域はその部族によって共同で保有され、所有されていた。だれか他人へ、絶対不動産権として売ったり譲渡したりする権利のある個別的な所有権は、彼らのあいだではまったく知られていなかった。絶対不動産権が適用される譲渡権つきの個別的所有権のような、土地にたいする財産知識を、人類へもたらすには、継続する二エスノス時代の経験と発達が必要であった。インディアン生活では誰もが、土地にたいする絶対的所有権をえることはできなかった。けだしそれは、一体としての部族に、慣習によって付与されていたからである。そして法的所有権によって絶対的な売却・譲渡権をもっている単独保有にふくまれたものという概念を、彼らはもっていなかった。だが彼は、占取されていない土地を、耕作によって占有することができた。そして彼が、こうしてそれを利用するかぎりは、彼はその土地を享受する占有権をもっており、それを彼の部族によってみとめられ、尊重された。園、耕地、長屋のなかの部屋、そして後代には、果樹園が、こうして個人によって、家族によって保有された。このような占有権は、彼らの十分な享受と、彼らのあいだでの彼らの利害をまもるために必要であった。人はその諸権利を同じ部族のなかの他人にゆずったり贈与したりできるが、うちたてられた諸慣習のもとでは、彼の同氏族員へ相続によって諸権利がわたされた。これは本質的には、未開の下期にあるアメリカ合州国とイギリス領アメリカの領域のなかのインディアン諸部族のあいだでの土地や家屋のなかの部屋の所有権にかんしての、インディアン制度であった。」

ここまでが未開下期（アヴェルキエヴァによれば未開上期としている）における、したがって文明以前の原始社会での所有のありかたであった。このあとモルガンは、独立自治をうしなったインディアンにおける所有についてのべる。

「連邦または州政府がインディアンの土地を収用するときには、それゆえに、土地にたいする支払いが部族へわたされ、利用にたいする支払いが占有権をもっている個人へわたされるという補償がなされた。」

このあとさらに、とじこめられてしまったセネカ部族のトナワンダ保留地でのありかたがモルガンによって記述されるのである。〔D〕のあとにクーノーが付記して引用しなかった個所にあたる。

「イロクォイ・セネカ部族のトナワンダ保留地では、土地の一部分は区画された諸農場にわけられ、それらは囲いされ、個別的に占取された。そしてのこりは部族によって共同で所有されている。若者が結婚して、生計をたてる土地をもっていないときには、首長たちはこれらの留保された土地の一部分を彼に分与する。これらの占取されている土地や占取されていない土地のすべてにたいする所有権は、部族の共同体にある。個人はその占有権をたがいに売買したり、賃貸したりすることができるし、白人に貸すことができる。アメリカ合州国のどの地方においても、白人はインディアンの土地にたいする所有権を、インディアンからいまや獲得できない。人はその占有を他人にうつすことができるが、家屋のなかの部屋は彼らの氏族員にのこさねばならない。」

合州国の主権のもとでの、あたえられた保留地での所有には、原始時代の名ごりがみられる。保留地の土地を白人はかりることができるが、この借地によって白人が保留地のインディアン生活をみだしたにちがいないと考えられる。オグデン土地会社によるセネカ部族の土地の買収問題にモルガンが関与していることもみのがしてはならない。このあとモルガンはさらにつけくわえている。

「ジェームス二世（一六八五―八八年のイギリス国王）のときには、土地を収用する権利は、王室の特権として帝王にだけあたえられていたが、この特権はわが国家と州政府がうけついだ。」（『……家庭生活』復刻本七九―八〇頁）。

ようするに白人支配者たちの絶対権が、保留地での部族の共有権をゆるしているだけである。

長い引用をあえてしたのも、『……家庭生活』の一端をしってほしいがためであるが、保留地にかんしての〔D〕と〔E〕の記述と、それ以前の独立自治のときの長屋生活をえがいた〔A〕引用文とをくらべて、アメリカ革命の前と後とでの、イロクォイ族の生活の根本的な変転をしるべきである。ざんねんながらクーノーはこのちがいをはっきりとしめしていないのである。

(7)

モルガンのさいごの著作『……家庭生活』を、クーノーにむすびつけて、わりとくわしく紹介してきたのであるが、昨年の拙著『原始共同体研究』のなかで、わたしは『……家庭生活』を訳してみたいともかいた。だが、そのまえからはじめていた下訳もやっと半分ほどおわったにすぎない。ほんやくのむつかしさとともに、時間のたらなさをつよく感じている。したがってまた、ずっと早くから考えていたモルガン死去一〇〇年、そして『……家庭生活』刊行一〇〇年を記念する論文が、ここでよまれるようなものになってしまったことを、みずからにものたらなく思う。それもこれも時間の不足のためといえば、それまでであるが、それにしても、すでに「教育国語」誌、一九八〇年一二月の第六三号と八一年三月の第六四号に

かいた『民族学が国語学と接するところ』Ⅰ、Ⅱのなかで、モルガンにふれながら、彼の著作『……名称諸体系』のなかでのべられている幕末の封建日本人の親族名称、とくに兄弟姉妹名称を紹介し、古代日本における男称・女称を論じたのが、せめてものなぐさめかもしれない。

そしてモルガンのマライ式親族名称体系を科学的に批判したリヴァースがうけつがれたうえでの、しかも新しい考古学的、民族学的な研究成果にたってのモルガン学説の展開がどれほどすすめられているかは、たとえばユ・ペ・アヴェルキエヴァによる『古代社会』刊行一〇〇年記念論文によみとられるのであるが、この論文も邦訳した。そしてアヴェルキエヴァ女史の死を悼む文もかかねばならなかった。あわせてごらんいただきたい。

二つ山イロクォイ族にかんして、サーヴィスの記述やリヴァースのモルガン批判についてもかいたが、これは記念論文のわくをこえてしまった感があるとしても、二つ山イロクォイ族のばあいを例証としての、マライ式親族名称体系にたいするリヴァースによる批判は、わたしの『原始共同体研究』におさめた論文『マライ式親族名称体系にたいする批判』のなかではふれなかったものである。それだけに、ここでとりあげたリヴァースのマライ式批判は、『原始社会組織』の著者であるサーヴィスのまちがいを批判するための重要な拠点となっていることを知っていただけるはずである。したがって、「歴史学研究」誌一九八一年三月号、四二頁で、「来年のモルガン死去一〇〇年を記念して論じてみたいと思う」とかいたこと（この文章は一九八〇年九月にかかれている）を、この場をかりて展開したことにもなるのである。

クーノーは『一般経済史』の第七章「イロクォイ族の経済制度」で、モルガン『……名称諸体系』をとりあげていないが、のこりの三つの民族学的著作をつかっている。わたしたちはモルガンのこれらの四著作のうちの『古代社会』だけを、邦訳でよむことができるが、のこりの三著作を、クーノーの邦訳された諸著作によって知っていただきたいと思う。このかぎりでは、戦前におけるクーノーの諸著作の邦訳は、戦後のいまでも意義をもっているのである。しかもクーノーを批判的によみとること、これによってモルガンを理解するための足場をつかむことが、いまのわたしたちに、なおものこされているのである。戦前にクーノーの諸著作を邦訳された方がたに、いまお礼をもうしあげることも、モルガン死去一〇〇年記念のためにも、モルガン研究の進展のためにも、ゆるされることにちがいないのである。

一〇〇年ごの現在、モルガンを記念することができたのは、すばらしい幸運であるにちがいないが、ここまでくると、三年あとの一九八四年の『家族、私有財産および国家の起原』一〇〇年をむかえるために、いまから準備をはじめても、決してはやすぎはしないとおもわれる。

モルガン学説が部分的に訂補されてきているので、それにしたがって『家族の起原』も補訂しなければならなくなる。これは最大の敬意をもって『家族の起原』をよむということであり、そのうえに、第四版で第一版を増補した学問的な良心にしたがうことである。この分野での彼みずからの深化は、彼をよむものたちの教条も停滞も模倣もゆるさないととるべきなのかもしれない。

（八一・四・一）

母権論 I

J・J・バッハオーフェン
訳・井上五郎

リュキア

1、母権に関するあらゆる研究は、リュキア民族から出発しなければならない。このために、極めて確実で内容豊かな証言がある。それ故にまず、われわれの任務は、以下のことすべてに対して確固たる基礎を得るために、古代人の報告を逐語訳で伝えることであろう。

ヘーロドトス〔の『歴史』〕第一巻、第一七三節は、リュキア人は本来クレータの出であり、サルペードーンの支配下にあっては、後になっても近隣の人びとからそう呼ばれていたように、テルミライ人と呼ばれていたが、パンディーオンの息子リュコスがアテーナイからテルミライ人の国のサルペードンの許に来たとき、テルミライ人は彼〔リュコス〕に因んでリュキア人と呼ばれるようになった、と報告している。さて、この歴史家は続ける。「彼らの習俗は一部はクレータ風であり、一部はカーリア風である。しかしながら、彼らは他のいかなる民族にもない特異な習慣をもっている。彼らは母の名をつけられるのであって、父の名ではない。リュキア人に、何者かと訊ねると、彼は母方の系統を述べ、自分の母の母たちの名前を挙げてゆく。もし市民の女が奴隷の男と結婚しても、子供たちは高貴な生まれとみなされるが、市民の男が、たとえ最上流階級の人であっても、外国の女か妾を娶るならば、子供たちは卑しい出である」。この箇所は、母の名をつける風習を子供の法的地位に結び付けて叙述しているので、すなわち、これに引き続く箇所すべてにおいて貫かれている基本的観点の一部として叙述しているので、大変注目に値する。

ヘーロドトスの叙述は他の著作家たちによって確認され、補足されている。この注目すべき慣習に関するダマスコスのニーコラーオスの著作に次のような断片が残っている。「リュキア人たちは、男よりも女にいっそうの敬意を表している。彼

らは、母にちなんで名をつけ、彼らの遺産を息子にではなく、娘に相続させる」。ポントスのヘーラクレイデースは短かい報告をしている。「リュキア人は成文法をもっておらず、ただ不文の慣習をもっているだけである。彼らは昔から女たちに支配されている」。これらの引用した証言にプルータルコス〔の『エーティカ』「女の徳」第九章の注目すべき叙述が加わる。そのためにヘーラクレイアのニュンピス Nymphis が証人として引き出されている。逐語訳をすると次のようである。「ニュンピスはヘーラクレイアに関する第四巻で述べている。かつて一匹の猪がヘーラクレイアの地を荒廃させ、動物や果樹を絶滅させたので、ベレロポーン〔ベレロポンテース〕に殺された。しかし、この英雄は、彼の善行に対してなんらの感謝も得られなかったとき、クサントス人を呪詛し、この地上のありとあらゆるものが塩を産み出すようポセイドーンに祈願した。すると大地が苦くなったため、すべてのものが破滅した。この状態は、ベレロポーンが女たちの懇願を尊重して、この悲惨な状態を終わらせてくれるようにもう一度ポセイドーンに嘆願するまで続いた。それ故クサントス人にあっては、父に従ってではなく、母に従って名付ける慣習が生じた」。ニュンピスの叙述は、母の名をつけることが或る宗教的見地の所産であることを示している。大地の豊穣 Fruchtbarkeit と女の妊娠能力 Fruchtbarkeit とが同一視されている。

この後者のことは、同じ神話の別の説明のなかでいっそう明瞭に強調されている。すなわち、プルータルコスは同じ箇所で次のように述べている。「リュキアで起こったらしいこの出来事は、なるほどいかにも作り話（ファーベル）めいているが、古い神話に基づいているのである。アミンダレース、あるいはリュキア人の呼び方ではイサラスは、この神話によると、好戦的で、しかも野蛮かつ残忍な男キマイラが指揮する数隻の海賊船をともなって、ゼレイア付近の植民地から来た。アミンダレースは前部にライオン、後部に蛇を印しにした船に乗って、リュキア人に非常な害を与えた。そのためリュキア人は航行もできず、海辺の町にも住むことができなかった。ベレロポーンはペーガソスにまたがってアミンダレースを追跡し、殺した。彼はアマゾーンたちをも追い払った。しかしベレロポーンは、自分の功に当然の報酬を得ることができず、イオバテースから極めて不当な扱いを受けた。そのため、彼は海へ行き、この地が荒れた不毛の土地とならんことをポセイドーンに祈った。彼が祈りをおえて再び立ち去ったとき、波が高まり、この地方に氾濫した。そびえたつ海が彼のあとに従い、平地を覆うような恐ろしい光景であった。男たちはベレロポーンの許に行き、海を鎮めてくれるように懇願する以外になす術を知らなかった。しかし、女たちが〈衣服の裾をからげて〉彼を出迎えたとき、彼は恥じらいゆえにわれにもどり、同時に海水もひいたとのことである」。

※

ここで井上五郎氏によって邦訳されましたのは、『母権論』本文の第一パラグラフであります。

ヨーハン・ヤーコプ・バッハオーフェン（一八一五―一八八七）によって一八六一年に出版されました『母権論』――より正しくは『母権論。宗教的および法的な性質からみた古代世界の女人統治の研究』――は、M・コスヴェンによりますと「ぎっしりと印刷された五〇〇頁ちかい、さまざまの分量の一六四章にわけられた大冊」であります。

だが著者のいう「パラグラフ」は、「章」というよりも、「節」というほどのことらしいので、「一六四章」は「一六四節」であり、したがって、邦訳のはじめにかいてある「リュキァ」が「リュキァ」章であり、冒頭の1でしめされています第一パラグラフは第一節をさすとみられます。

このような第一パラグラフの題名は、本文ではかいてありませんが、目次では「リュキアの母権についての証言の総括」でありますす。第六集に邦訳されました『バッハオーフェン「母権論」目次』をごらんください。

『母権論・序説』の訳は、すでに第三集にけいさいされましたが、いまや『母権論』本文を、本邦初訳として、よむことができるようになったことを、わたしたちは心からうれしく思います。

（編集部）

女性研究第三集
――特集・『母権論・序説』――

母権論・序説　訳・井上　五郎
ギリシアの女神たち　布村　一夫
富野敬邦氏を偲ぶ　石原　通子

女性史研究第六集
――特集・『母権論』のために――

『母権論』目次　訳・井上貫美子
母権　W・H・R・リヴァース
『母権論』解説Ⅰ　訳・犬童　美子
M・コスヴェン

女性史研究第九集
――特集・母権の発見――

J・J・バッハオーフェン論　訳・井上　五郎
婚姻と家族の成立　C・カウツキー
『母権論』解説Ⅱ　M・コスヴェン

1981年6月1日　印刷
1981年6月1日　発行

女性史研究　第12集

頒価　500　円
（送料実費）

編集　家族史研究会

東京事務局　東京都中野区新井4—27—6—801
〒165　Tel 東京(03)385—0147
振替口座・東京　3—12894

熊本事務局　熊本市池田3—2—30　犬童方
〒860　Tel 熊本(0963)54—6158
郵便振替口座・熊本13171
家族史研究会熊本事務局

共同体社